

# 建築と社会

Architecture and Society

特集  
新しい足音が聞こえる  
—想像した未来、創造する未来—

2025 12  
vol.106 No.1245  
日本建築協会

# 協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」についてのお知らせとお願い

一般社団法人日本建築協会（以下「本会」という）では、「著作権」に関して、協会誌「建築と社会」2018年6月号において『掲載された論文・記事の著作権を著者から本会に譲渡願うこと』とお願いをさせて頂きましたが、時代背景も変わってきたことから、著作権について、新たに以下の様に規定いたします。

## 1. 著作権について

- 本誌に掲載された個々の論文・記事・図面・写真等の著作物の著作権は、各執筆者、制作者である著作者に帰属するものとします。
- 協会誌「建築と社会」、協会WEBサイトにおける編集著作権は、発行者、制作者である本会に帰属するものとします。

## 2. 著作者人格権について

- 著作物について、円滑な編集・公開のために、誤字脱字の修正や見出しの変更など、本会が必要と認める範囲で手直しをさせていただく可能性があるため、本誌にご投稿いただくことで、同一性保持権を行使されないことにご同意いただいたものとします。なお本会は、著作者の名誉を損なうことのないよう十分に留意いたします。

## 3. 著作者の責任

- 著作者は、著作物が第三者の著作権・肖像権・その他の権利を侵害しないことを保証するものとします。
- 著作物に関して第三者から権利侵害等の申し立てがあった場合は、著作者ご自身の責任において解決いただくものとします。

## 4. 本会への利用許諾

著作者は、本誌にご投稿いただくことで、ご自身の著作物について、本会が以下の目的で利用することを非独占的に許諾していただくものとします。

- 協会誌「建築と社会」での掲載（複製）、及び頒布
- 本会ウェブサイト等での公衆送信（会員限定公開を含む）
- 本会が協会誌「建築と社会」掲載記事を記念誌等で転載再利用すること（データを再編集し転載することを含む）
- 第三者から本誌掲載著作物について利用申請があった場合、本会がその利用を許諾すること

## 5. 著作者ご自身の利用について

本会に利用を許諾いただいた後も、著作者ご本人の権利として、ご自身の著作物を、ご自身の論文集への再録・ウェブサイトでの公開・研究・教育活動などで自由に利用することを、何ら妨げるものではありません。

## 6. 過去にご寄稿いただいた著作物について

過去に本誌にご寄稿いただいた著作物についても、上記趣旨をご理解いただき、ご同意頂いたものとして、取り扱わせていただきます。ご不明点がある場合は、2026年3月末日までに下記の本会事務局までお申し出ください。

### 【問い合わせ先】

一般社団法人 日本建築協会

担当：柏原

TEL：06-6946-6981

E-mail：kyoku-tyo@aaj.or.jp



19



ひと・まち・建築

gallery

6

474

設備  
の頁

45

663

法令  
コーナー

46

# 建築と社会

Architecture and Society  
Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2025 12

Vol.106 No.1245

■特集予告

● 1月号/未定

● 2月号/第32回 会員特集 “私の空間作法”

ご意見ご要望は  
こちらから



48

2025年度 年間特集テーマ「未来」

## 特集 新しい足音が聞こえる

— 想像した未来、創造する未来 — 19

FILE 01	いしみらいラボ ● 矢橋晋太郎	20
FILE 02	ウッズスピーカーが未来をデザインする ● 横濱金平	24
FILE 03	「Re SHIMIZU-URA PROJECT」について ● いたもとみひさ	28
FILE 04	暮らしのなかにあった手しごとを、未来につなぐ ● 内田将大	30
FILE 05	屋台から繋がる人とまちの未来 ● 今村謙人	32
FILE 06	森のある暮らしを日常にするための実験室 ● 久住一友 沖本雅章	34
FILE 07	里山を100年先につなぐ ● 中川悠奈 吉村 理	36
FILE 08	五感を満たすメイドインジャパン「継承と革新」 ● 芝 幸太郎 椿 邦司	38
FILE 09	クリエイティブ領域におけるAI設計支援の進化と未来展望 ● 若尾正仁	42

project 中央日土地博多駅前ビル 2

gallery ROOT DOWN sdf ● まつうら (松浦正) 6

大阪・関西万博の風景 1/3 7

会告	協会誌『建築と社会』掲載文における「著作権」について のお知らせとお願い	表2
	「建築と社会賞」再開のお知らせ(予告)、2026年在阪 建築関係16団体合同新年交礼会	14
	学生のための現場見学会「株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎建替計画工事見学会」	15
	情報見学小委員会主催 第38回『茶室』見学会	16
	講習会委員会主催 2025年度 建築工事実務講習会	17
	日本建築協会東海支部主催 建築工事実務講習会	18

設備の頁 送風コストゼロでCO<sub>2</sub>を回収  
～パッシブDAC技術の研究開発～ ● 並木洗樹 45

法令コーナー 「ゼノベ」-既存テナントビルをバリューアップするZEB改修  
● 小谷陽次郎 46  
2025年の振り返り ● 河野 学 47

「再読 関西の建築」は休載します

Member's Forum	イケフェス大阪2025 スペシャルツアー日本建築協会Presents! 「大大阪100年、中之島中央部を歩く」レポート	48
	京都支部：太田病院三河内分院現地調査及びインタ ビュー記録(2) — 沖種郎の足跡と地方集落における文化 財のこれから —	50

information 特別展 小磯良平展 — 幻の名作《日本髪の子》／拡大  
するシュルレアリスム 視覚芸術から広告、ファッション、  
インテリアへ／ゴッホ展 家族が見つない画家の夢／  
CREVIA マチュピチュ展 54

月間の動き 2025年10月 56

表紙：「時の痕跡をひらく」 撮影：佐々木琉偉

招待券  
プレゼント!

ひと・まち・建築

## project

# 中央日土地博多駅前ビル

建築主 中央日土地建物株式会社  
設計・監理 株式会社竹中工務店  
施工 株式会社竹中工務店

所在地 福岡市博多区博多駅前3丁目4-1  
敷地面積 1,388.04㎡  
建築面積 1,052.52㎡  
延床面積 13,041.12㎡  
構造 S造、一部RC造、SRC造、免震構造  
規模 地上13階、地下2階  
工期 2023年9月～2025年6月  
撮影 新築時写真 株式会社 ナカサンドパートナーズ  
解体時写真 針金建築写真事務所

### “まち”のため、“ひと”のため、 “地球”のためのオフィス

JR博多駅から南西に徒歩5分程の住吉通りに面する敷地には、かつて地下3階・地上10階の黒色花崗岩の重厚な外装による、新耐震基準による本社ビルが建っていた。賃貸オフィスに求められる平面計画は本社オフィスと全く異なるが、何とかこの建築を遺すことは出来ないか？と最初に考えた。複数案の比較検討結果、既存建物の地上3階以上を解体し、地下と地上2階までは既存躯体を補強、免震層を介し13階の新築ビルを構築するスキームに辿り着いた。博多コネクティッド制度を活用し1階では敷地の4割以上を公開空地とすることで、“まち”に開き、“ひと”を支え、“地球”に貢献する新たなオフィスのかたちを追求した。

[竹中工務店]

須賀定邦(すが さだくに)



1998年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了、同年竹中工務店入社。現在、竹中工務店大阪本店設計部設計第2部長兼インテリア部長

軽部 蘭(かるべ らん)



2021年早稲田大学創造理工学術院建築学専攻修士課程修了、同年竹中工務店入社。現在竹中工務店大阪本店設計部設計第2部門2グループ

高山一斗(たかやま かずと)



2011年九州大学大学院人間環境学府修了/同年株式会社竹中工務店入社/現在、同社九州支店設計部構造3グループ シニアチーフエンジニア

原野 茂(はらの しげる)



1991年竹中工務店入社  
現在、竹中工務店九州支店 作業所長

テラスで過ごすオフィスワーカーの姿がまちの風景になる



既存躯体を補強した柱梁には層状に積み重ねた仕上げを施した





全ての貸室に緑化テラスを設置した



大断面のRCの列柱が並ぶ1F南側のピロティ

## 既存躯体を再利用した環境配慮型オフィス

築40年の新耐震基準建築物を残すことをテーマにスタートした本計画は、解体を一部の地上躯体のみに止めることで、解体数量は通常比52%減となった。新築の数量も同様に37%減となり、解体時・新築時の大幅なCO<sub>2</sub>排出量抑制を実現した。運用時のCO<sub>2</sub>削減対策としては、建物外皮負荷を徹底的に低減しつつ、オフィスとしての快適性を確保するために、アウトポールのRC躯体をPCa材で構築した。通常はマンションに採用する工法の採用により、日射熱取得量を63%削減し、BELS★★★★★、ZEB Oriented (BEI値0.59) 認証、CASBEE建築Sランク、CASBEEウェルネスオフィスSランク等の、環境性能を獲得した。解体～新築～運用に至るまでをひとつながりに捉え、“地球”のためにオフィス建築に何が出来るのかを考えた。

博多駅から住吉神社に至る銀杏並木を補完すべく、1階足元や2階梁上レベルを緑化した。更に3-12階のオフィス部分にも緑化テラスを設け、四季折々変化に富んだ風景を見せる全面緑化建築とした。また1階公開空地では、二層吹き抜けのピロティ空間が、暑い日差しを遮り、雨を防ぐと共に、西側ではバスの待合空間やレンタサイクル場の機能を、東側では移動可能なベンチのあるイベント空間の機能を付与した。民間貸オフィスとして“まち”のために最大限の貢献をしたいと考えた。

オフィスワーカーに対しては、感染症対策の観点のみならず、快適かつ創造的に働ける環境を提供するために、全ての貸室区画に外動片引き戸を開けて自由に入出りできる緑化テラスを設けている。構造的には2階柱頭レベルに中間階免震層を設けた免震構造を採用し、最大限の安全性を担保した。地震力を受ける2階以下の地球側構造体は、既存SRC躯体を新しいRC躯体で補強一体化した上で、8か所のダンパーを設けた制振構造としている。既存躯体を補強した地下自走式駐車場を引き続き利用可能とすることで、ここを訪れ、ここで働く全ての“ひと”に、優しく便利で安全な建築を目指した。

この建築は、多くの端正なカーテンウォール建築とは異なるが、我々が追求したのは、真の意味で社会のインフラとなる骨太で冗長性あるオフィスのかたちである。

(須賀定邦・軽部 蘭／竹中工務店設計)

既存建物



今回計画



▽2F柱頭

▽1F

▽10階建て

▽2F柱頭

▽1F

▽13階建て

新築

既存利用

免震建物側

▽免震層

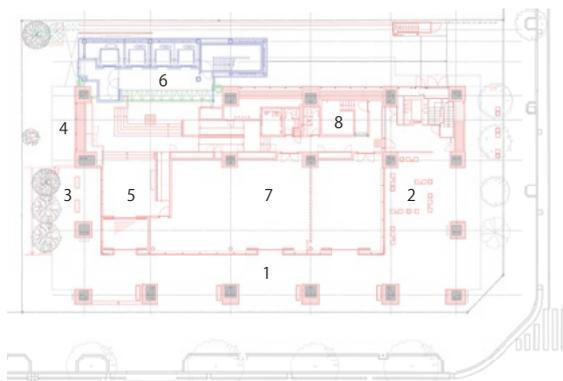
免震地球側

■ 既存躯体

■ 新築免震建物側

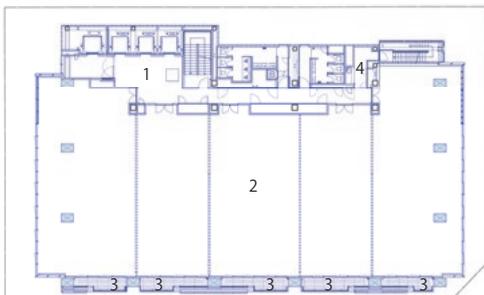
■ 新築免震地球側

1F平面図

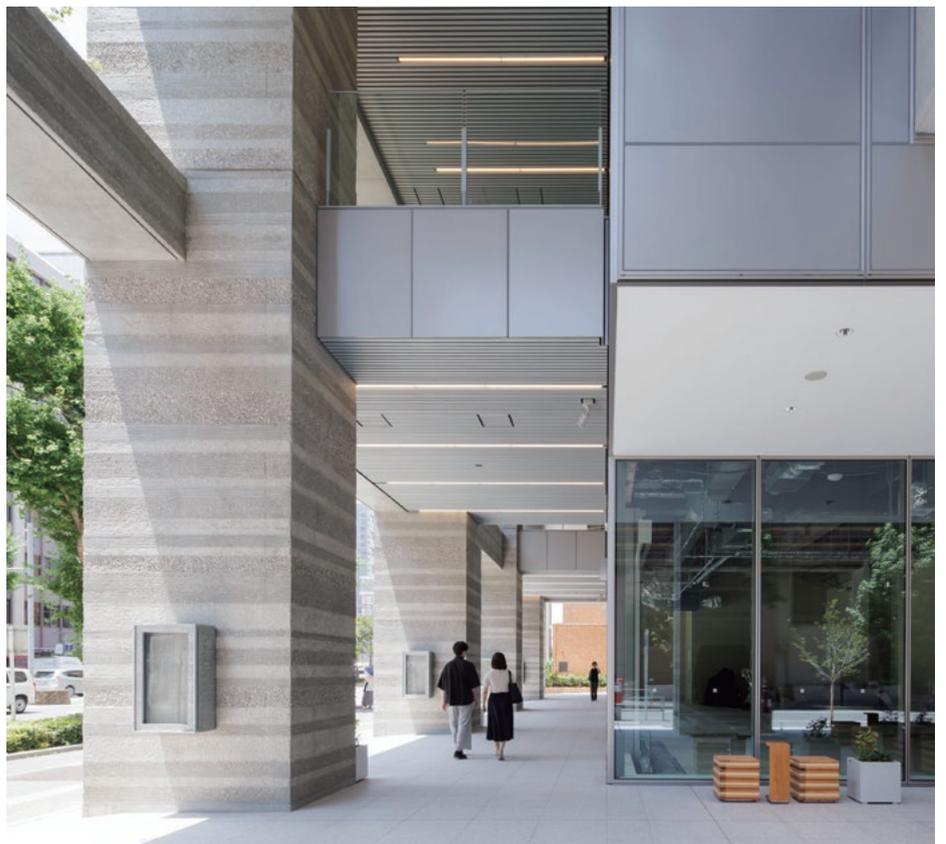


- 1 ピロティ
- 2 東側公開空地
- 3 西側公開空地
- 4 シェアサイクルポート
- 5 エントランスホール
- 6 EVホール
- 7 店舗
- 8 中央管理室

基準階平面図



- 1 EVホール
- 2 貸室
- 3 専用テラス
- 4 給湯室



低層足元は既存躯体を利用したRCの柱梁による二層吹き抜けのピロティや東西の公開空地によりまちに広く開放している

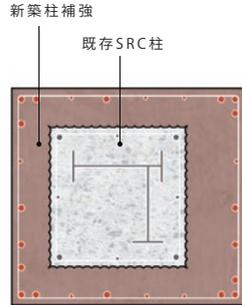
### 既存躯体を利用するための丁寧な施工計画

既存建物（地下3階、地上10階）の地下3階から地上2階までを補強利用し、中3階に中間階免震を設け、その上に新築躯体を設けるという非常に難易度の高い工事でした。

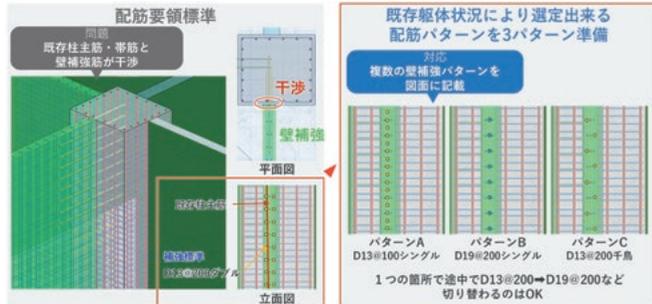
既存躯体を補強利用するにあたり、既存建物解体期間中早期に既存図をベースにBIMにて既存躯体モデルを作成し、新築躯体モデルと重ね合わせを行い、解体範囲の調整を行いました。また解体時に既存躯体の実測を行い当初想定と相違がある部分については設計者へ情報共有と協議を行い、設計図書に反映し手戻りを防止しました。既存躯体の補強工事は類似例も少なく手探りでの工事も多くありましたが、施工方法・施工手順、品質管理方法を検討改善し、また補強納まりのパターン化等により、工程内にて補強工事を進めることができました。



既存補強のイメージ（紫が補強部）



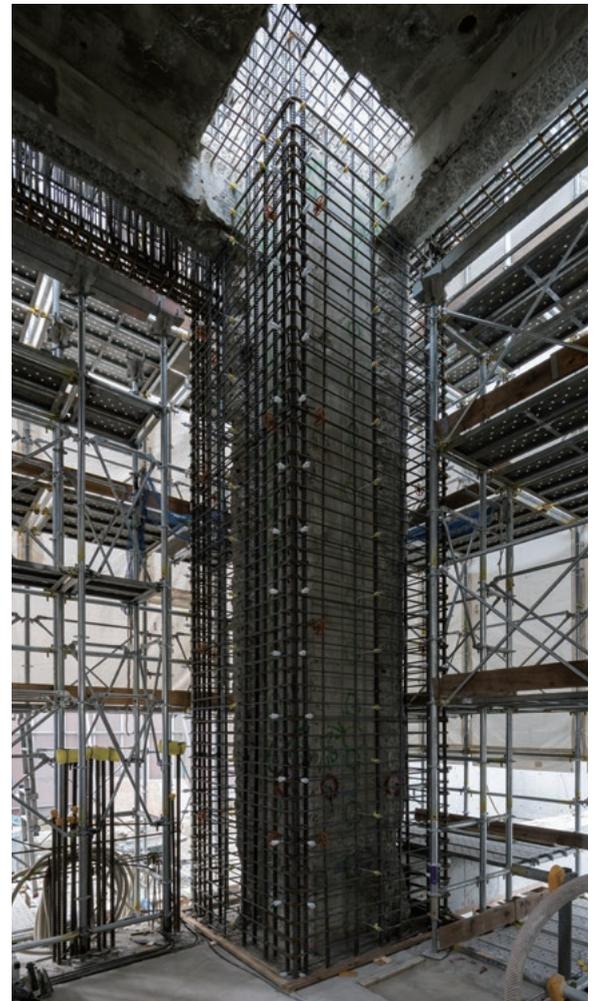
柱補強のイメージ



現地で1カ所ずつ配筋を調査し補強方法を判断した。



既存鉄筋の位置を確認しながら削孔する



既存の柱を新設の鉄筋により巻かたてて補強した

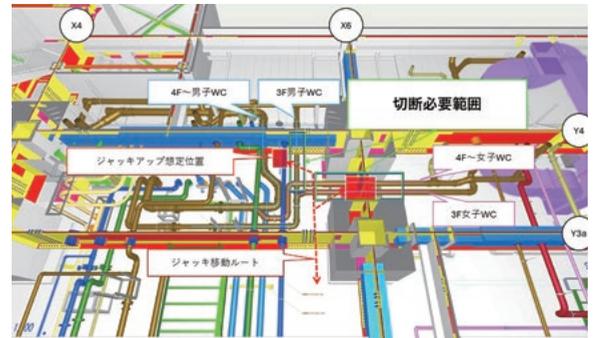
### 複雑な構成・施工工程をBIMによる見える化で効率化・スムーズな合意形成を実現

中間階免震部においてはSolibriを用いて免震クリアランスの確認を実施し、また竣工後の免震階メンテナンス計画を立案し、免震階の点検ルート、将来の免震装置取り替え時のルートや影響範囲等を見える化し、建築主とBIMモデルを見ながら合意形成を行いました。

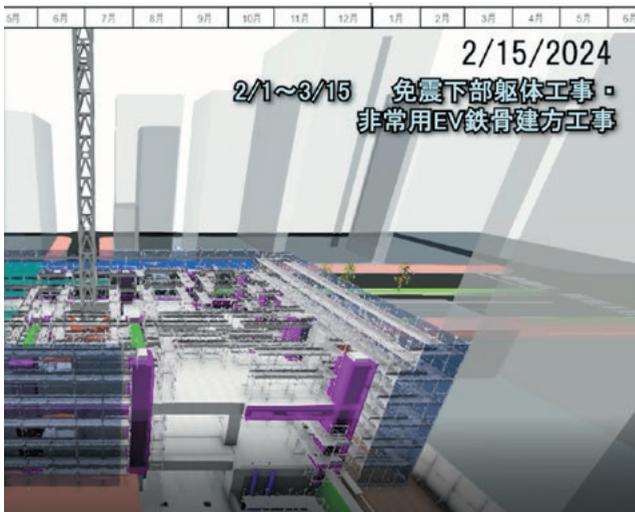
新築部分においてはRCとS造のハイブリット構造であり、関係する工種が多く施工手順が複雑であったために、工事ステップをBIMモデル（ARCHICAD）で作成し、またFUZORによる施工動画も作成し施工ステップの見える化を行い、協力会社との打合せ等で活用し、計画通り手戻りなく工事を進めることができました。

いずれの工事においても施工管理の基本である受け入れ検査、工事のステップ毎の確実な現地現物の確認を徹底して実施し、確実な品質管理を行うことにより工期内に工事を完了することができました。既存躯体を大規模補強利用するというこれまで経験したことのない工事でしたが、従来の工法に比べ解体時・新築時共に大幅にCO<sub>2</sub>を削減することができ、循環型社会や脱炭素社会のニーズに合致したプロジェクトであったと思います。

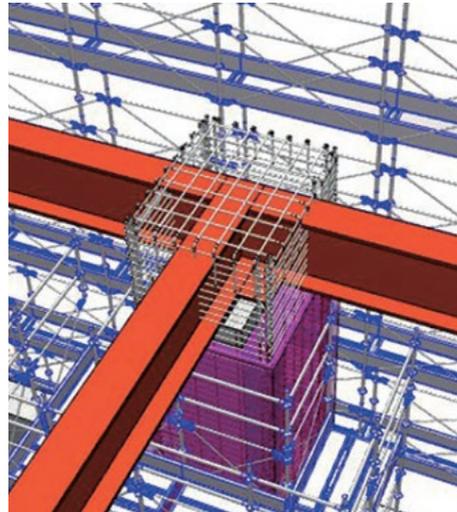
（原野 茂／竹中工務店作業所）



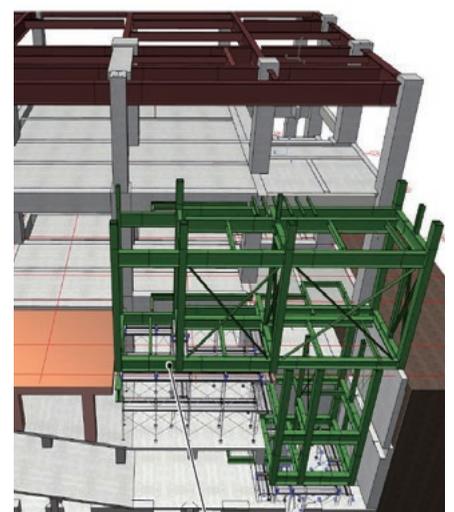
免震層のBIMモデルを精密に作り込み、免震装置取換時のルートや影響範囲を見える化することで、建築主と合意形成をスムーズに行った



施工ステップを再現する動画をBIMモデルを活用して作成して、情報共有や合意形成をスムーズにした



BIMモデルにより複雑な免震装置部の施工ステップを見える化した



BIMモデルで免震吊下部やExp.Jの納まりを調整した

兵庫 震災の復興住宅



大阪 古民家リノベーション



大阪 事務所リノベーション



金沢 物販店舗



## 工房アイデア～内科と外科

設計という行為は医療で言えば内科だと思う。私はあくまでも建築の内科医として、その原因を徹底的に調べ、建築にとっての最善策を模索する。新築ならその土地・環境。リフォームなら目の前に在る空間にしっかり向き合う。それが設計者の基本である。

## ROOT DOWN sdf.

[あなろぐnet♪クリエイター]  
まつうら (松浦正)

### ROOTDOWNsdf.

ルートダウン ソシャルデザインファクトリー  
社会に深く広く根を張り“もの・ひと・じかん”  
を提供・発信し続けるファクトリー

#### “建築”

建築・伊藤忠太さんのこの言葉は素晴らしい。しかし、現在の建築界はこの言葉の本来の意味からズレているような気がする。RDsdf.は本来の建築の意味を模索していきたい

#### “無作為の作為”

これはある盆栽作家 小林國雄さんの言葉だと認識している。私のものづくりの基本

#### “建築ボランティア”

被災した神戸市役所で預かった腕章



松浦 正 (まつうら ただし)

- 1961年 大阪市生まれ
- 1980年 大阪府夕陽丘高校卒業
- 1980年 京都工芸繊維大学 工芸学部。建築学科 入学
- 1984年 大阪山田守建築事務所入社～1987年
- 1987～1988 スペイン サラマンカ語学留学  
～ヨーロッパバックバック旅行
- 1989年 1級建築士事務所工房アイデア設立
- 1995年 有料建築相談赤ひげ住宅ネット設立
- 2002年 bac.u interior design 設立
- 2013年 ROOTDOWNsdf.設立
- 2016年 cafe&bar playing RECORDS WALTZ 開店
- 2023年 古物商ワルツ 開店
- 現在に至る

- その他
- 1989～2008年 修正建設専門学校 非常勤講師
  - 1998～現在に至る 大阪モード学園 非常勤講師
  - 2002～現在に至る (株)金剛堂 建築顧問

企画編集：豊田充広 (ひと・まち・建築小委員会)



one side long live

今世界中で話題の tyny desk concert を、レコード片面の長さ、one side long liveとしてイベント開催中！

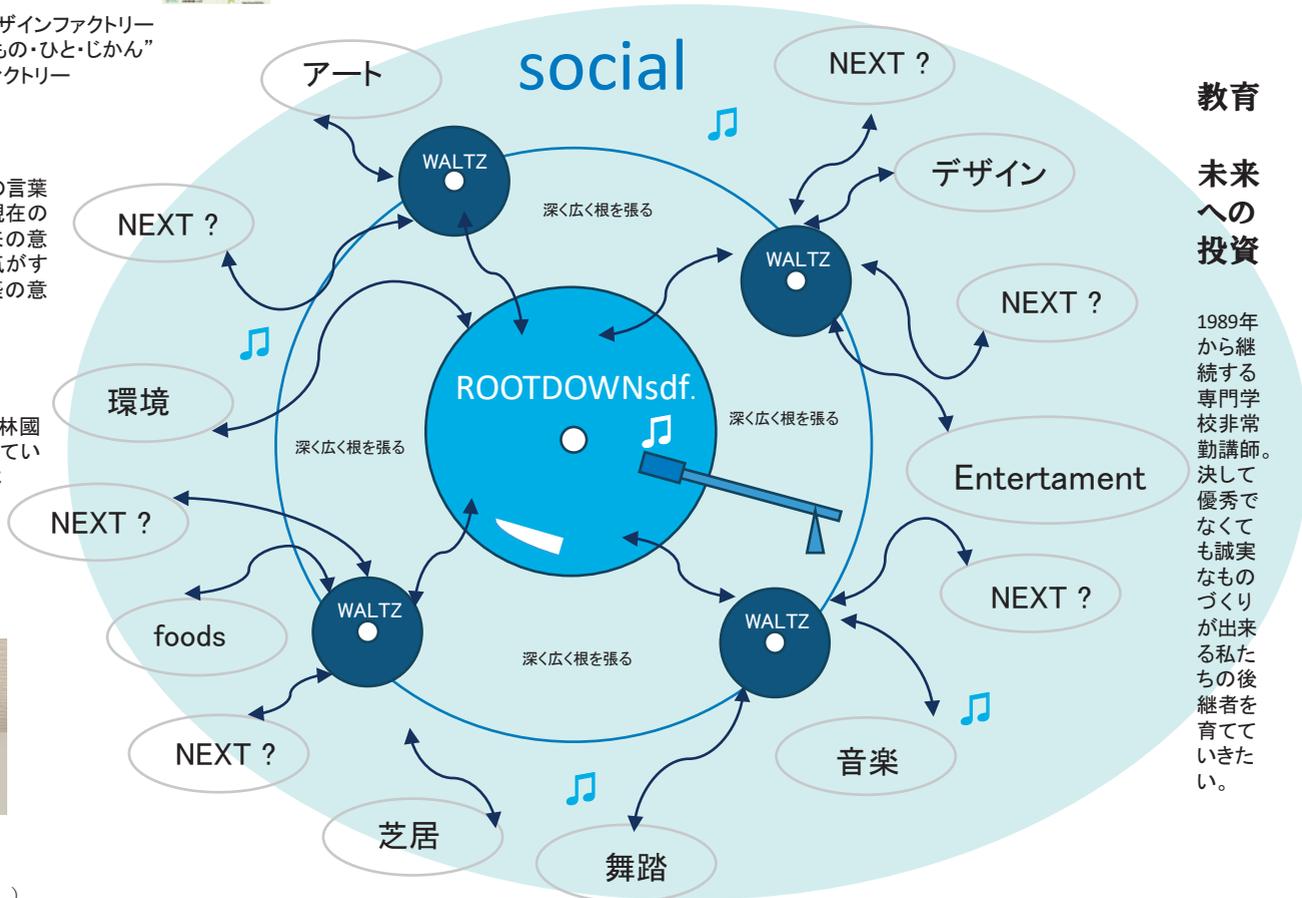


THIRD PLACE

約3500枚のレコード・映画・古書が人と人をリアルにつなぐ情報発信基地



cafe&bar playing RECORDS WALTZ



教育  
未来への投資

1989年から継続する専門学校非常勤講師。決して優秀でなくても誠実なものづくりが出来るとは後継者を育てていきたい。

## 赤ひげ住宅ネット～無知と貧困

1996年の阪神淡路大震災。震災後、国交省からの要請で2週間後に現地に入り、それ以来約3年間復興関連の仕事に携わる。この時、一般の方と建築関係者の間に大きなみぞがあることを目の当たりにした。黒澤明監督の映画“赤ひげ”で表現されている一般大衆を指す言葉“無知と貧困”。これが現代の建築と社会との関係にも存在することによる“みぞ”を少しでも埋められるように有料建築相談を始めました。

## bac.u バクインテリアデザイン

インテリア・家具 (店舗・リフォーム) ものづくりに携わるときに使う名称。  
B=brain A=art C=communication U=unlimited



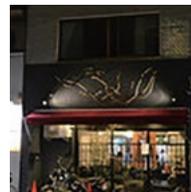
島根 飲食店



大阪 飲食店



兵庫 宿泊施設



京都 花屋

## 大阪・関西万博の風景

2025年10月13日大阪・関西万博は閉幕しました。

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに準備が進められてきましたが、開幕前は実際にこの万博で何が体験できどんな魅力があるのかなど、当時は情報が非常に少なかった状況に加え、様々なトラブルや運営面での課題があったことに対して、多くのメディアでは批判的な意見が大半を占めました。4月13日の開幕後、会期が進むにつれて実際に訪れた人からの前向きな発信が増えてきました。会期終盤にはパビリオンやイベントだけでなく会場への入場も困難になるほどの盛況となり、最終的には入場者数2,500万人を超える大成功の中、惜しまれながら幕を閉じました。

分断や紛争が頻発する国際情勢において、世界各国が物理的に1か所に集まることの素晴らしさが徐々に理解されてきたことは言うまでもありませんが、大屋根リングをはじめとする多くのパビリオンとそこに居る人々が重なり創り出す会場の風景や空気感が最も人々を惹きつけたのではないのでしょうか。デジタル技術を活用した様々な展示や体験が未来を感じさせてくれた一方で、私たちはこの万博を通じて「場の力」そして「建築の力」を再認識しました。

本号より3か月に渡り「大阪・関西万博の風景」と題し、パビリオンのほか会場内の様々な風景を紹介します。本企画は編集企画委員会の委員が中心となって会場を何度も訪れ、記憶に残したい写真を撮影しました。大阪・関西万博を体験されたみなさまにあの熱狂と感動を思い出していただければ幸いです。

撮影・編集：編集企画委員会+釜谷薫平（東畑建築事務所）



# Pavilions

東ゲートゾーン  
エンパワーリングゾーン



EXPOホール「シャインハット」



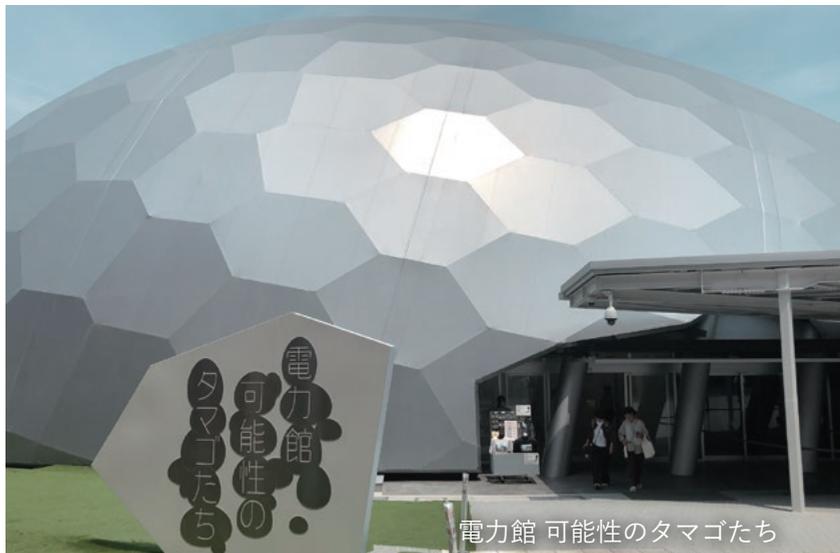
NTT PAVILION



大阪ヘルスケアパビリオン Nest for Reborn



住友館



電力館 可能性のタマゴたち



三菱未来館



パナソニックグループパビリオン「ノモの国」



ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier



日本館



EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」



関西パビリオン



アイルランド館



マレーシア館



フィリピン館



アメリカ館



フランス館



カタール館



アラブ首長国連邦館



カナダ館



ポルトガル館



コロンビア館



スイス館



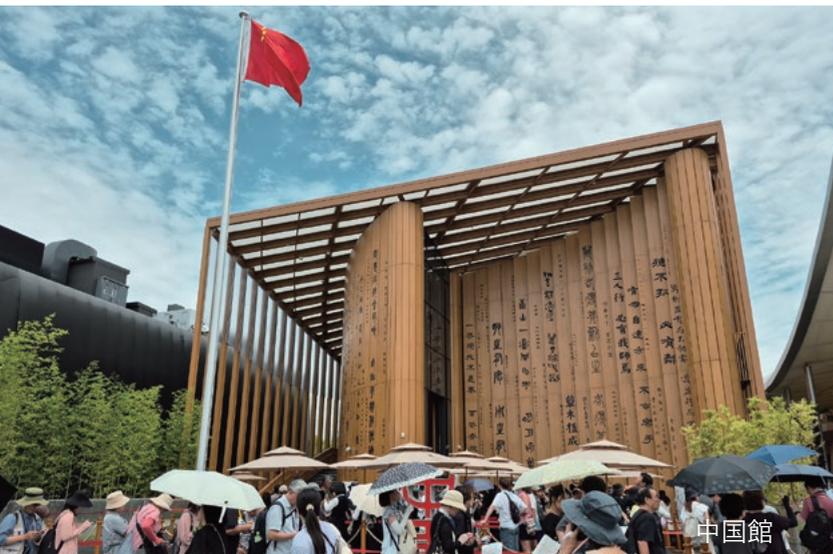
オーストリア館



ブラジル館



クウェート館



中国館



バーレーン館



トルクメニスタン館



北欧館 (ノルディック・サークル)



マルタ館



チェコ館



## 「建築と社会賞」 再開のお知らせ (予告)

日本建築協会では、2001年に、協会誌『建築と社会』の趣旨にふさわしい、社会性や環境などに配慮した建築プロジェクト、及び建築に関わる論文・記事などを顕彰する「建築と社会賞」を創設し、2020年まで18回にわたり実施してまいりましたが、その後のコロナ禍により、審査の実施が困難となったため、やむを得ず一時中断となっていました。この度、再来年2027年度に、日本建築協会創立110周年を迎えることから、「建築と社会賞」を再開する運びとなりましたので、お知らせいたします。

### 〔選考対象〕

協会誌『建築と社会』に掲載されたプロジェクトから選考する「プロジェクト部門」と、各号特集記事や寄稿から選考する「寄稿部門」の2つの部門からなり、第19回「建築と社会賞」は、2026年1月から12月号までの協会誌『建築と社会』に掲載されたプロジェクトと各号特集記事や寄稿から選考するものとします。

### 〔選考・スケジュール〕

- ・第一次選考：2027年2月度の常任理事会において実施
- ・本選考：2027年3月（予定）外部有識者、本会会長を含む選考委員会において実施
- ・発表：入賞者は、本人に通知するとともに、『建築と社会』2027年4月号（予定）で発表。
- ・表彰：6月に開催される日本建築協会2027年度総会で表彰。

### 〔表彰内容〕

プロジェクト部門：最優秀賞1点、その他数点。

寄稿部門：最優秀賞1点、その他数点。

各入選プロジェクト・論文・記事に対し、賞状、記念品を贈呈。

## 2026年 在阪建築関係 16団体 合同新年交礼会

日時 2026年1月5日(月)  
15:00~16:00  
会場 リーガロイヤルホテル 2階  
「山楽」(昨年と同様)  
大阪市北区中之島5-3-68  
TEL.06-6448-3431  
※早めのご来場をお願いいたします。

参加者 700名(会員申込)  
会費 4,000円(税込み)

申込 12月3日(水)までに会費を  
下記へお振り込みの上、メ  
ールにて、氏名・勤務先をお知  
らせ下さい(出席者名簿作成  
のため必須)。

メール送付先 soumu@aaj.or.jp  
TEL.06-6946-6981  
FAX.06-6946-6984

振込先 ・三井住友銀行大阪中央支店  
普通 0860034  
・三菱UFJ銀行瓦町支店  
普通 0210054  
・郵便振替口座  
00910-9-39975

名義はいずれも  
シャ)ニホンケンチクキョウカイ  
一般社団法人日本建築協会

共催 (一社)日本建築協会  
(一社)日本建築材料協会  
ほか14団体



学生のための  
現場見学会

## 「株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎建替計画 工事見学会」

日時

2025年12月17日(水)  
14:30~16:30(予定)  
受付開始 14:15

講師 株式会社東畑建築事務所  
設計室  
平野尉仁・広瀬和也・西辻帆波



お申込みはこちら

### 住まいながら、学び・つくる自社寮

ライフスタイルの多様化に対応した設計事務所の自社寮の建て替え計画。入社して間もない若手社員24人が住まう。オフィスだけでなく住まいもまた、設計者としての土台を形成する場であり、コミュニケーションやアイデアが生まれる場でもある。そのため、あらゆる部署の若手社員22人で構成する「寮のあり方ワーキンググループ (WG)」を立ち上げ、ひとりになれる場と、他の寮生と交流できる場の共存をテーマとし、そのあり方を模索した。

プライバシーは確保しつつ寮生同士の偶発的な出会いやコミュニケーションが生まれるよう、住み手目線と設計者目線とを行き来しながら設計を進めた。最終的にはコモン/プライベートの間の曖昧な空間を設け、ほどよく人の存在を感じ、人との距離感を選択できる構成となった。

つくり込み過ぎないことで、若手社員はただ「住む」だけでなく、住みながら自分たちの住環境を「学び」「つくる」ことができる。また、寮生同士だけでなく地域や自然環境との繋がりも意識できる場を目指した。

### 【建築概要】

工事名：株式会社東畑建築事務所  
大阪草煙舎建替計画

発注者：株式会社東畑建築事務所  
設計・監理：株式会社東畑建築事務所  
施工：不二建設株式会社

工期：2025年3月～  
2026年2月末引渡し

### 建築規模

階数：地上3階  
構造：S造  
建築面積：283.84㎡  
延床面積：678.99㎡

所在地：兵庫県神戸市東灘区甲南町  
4-1-5

最寄駅：JR神戸線 摂津本山駅  
徒歩20分

集合場所 現地(詳細は参加証に記載)  
定員 10名  
参加費 無料

### 申込方法

- ①催し名「株式会社東畑建築事務所 大阪草煙舎建替計画工事見学会」
- ②学校名・学部・学科・学年
- ③学生氏名(ふりがな)
- ④引率者 職名・氏名(ふりがな)  
※学生のみの場合不要
- ⑤連絡先電話番号・E-mail  
上記を明記しHP又はE-mailにてお申し込みください。  
参加証は後日送信します。

### 申込締切日

2025年12月10日(水)  
\*ただし定員になり次第、締め切らせていただきます。

### 問合せ・申込先

一般社団法人日本建築協会  
(担当：中内)  
TEL：06-6946-6981  
FAX：06-6946-6984  
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp



平面モデル

## 令和7年度 情報見学小委員会 主催 第38回『茶室』 見学会

日時  
2025年12月6日(土)  
13:30~15:30(予定)

受付開始 13:15

\*ただし定員になり次第、締め切らせていただきます。

この催しは建築CPD情報提供制度  
認定プログラム申請予定です。



お申込みはこちら

第38回を迎えます茶室見学会。今回は、大徳寺三玄院の「篁庵」を見学させて頂きます。藪内家「燕庵」の写しとして大変貴重な茶室を、京都建築専門学校副校長の桐浴先生による解説で楽しんで頂ければと思います。皆様の参加をお待ちしています。

京都藪内家には初代剣仲が古田織部から贈られた茶室が伝来している「燕庵」がある。藪内家は二代紹智以来、西本願寺門主の茶道師家に迎えられており、文政八(1825)年文如上人が藪内家の燕庵を山内に写し建てた。これが篁庵である。明治になって篁庵は三玄院に移築されて現在に至っている。移築の際茅葺の屋根が緩い瓦葺に改められたが、他は殆ど旧態を伝えている。燕庵は、古田織部の好みを代表する茶室で、江戸時代には利休の待庵と並ぶ茶室の典型のように取り上げられていた。三畳台目の客座に二本襖を隔てて一畳板畳入の別畳を付した間取が特色である。この別畳のあることによって、客座の伸縮も可能である。別畳の使われ方等、この茶室には織部による創意工夫が多く含まれている。とりわけ注目されるのが窓の多いことで八窓を数える。利休とは対照的な工夫であった。そうした織部の工夫を検証することの出来る遺構である。

見学先  
大徳寺三玄院「篁庵」  
所在地  
京都市北区紫野大徳寺町76  
最寄駅  
京都市営地下鉄「北大路」/  
京都市営バス「大徳寺前」

講師  
桐浴邦夫  
(京都建築専門学校 副校長)

プロフィール  
1960年和歌山県生まれ。  
京都工芸繊維大学大学院修士課程で中村昌生先生に師事し、その後東京大学で博士号を取得。  
専門は、建築歴史意匠・茶の湯文化・伝統建築保存活用。  
著書に『茶室33選 利休・遠洲から近代まで』(a+u建築と都市2022年11月臨時増刊)、『世界で一番やさしい茶室設計』(エクスナレッジ2020)、『茶の湯空間の近代』(思文閣出版2018)、『近代の茶室と数寄屋』(淡文社2004)などがある。

集合現地  
(詳細は参加者に通知)  
定員 20名(定員になり次第締切)  
申込締切日 2025年11月27日(木)  
参加費 会員:4,000円  
一般:5,500円

申込方法  
ホームページまたは左記QRコードからお申し込み下さい。E-mailでのお申し込みも受け付けております。  
①催名  
②氏名(フリガナ)  
③会員、一般の別  
④職場名、学校名  
⑤住所  
⑥当日連絡先電話番号  
⑦メールアドレス  
⑧CPD単位申請希望者はCPD登録番号を明記  
※見学会は参加費の前払い制となっております。お申し込み後、協会よりお支払い方法をご案内いたします。ご入金の確認が取れ次第、参加証をE-mailにてお送りします。

連絡先  
(一社)日本建築協会(担当:中内)  
TEL:06-6946-6981  
E-mail:jigyoka@aaaj.or.jp



講習会委員会 主催

## 2025年度 建築工事实務講習会

—第一線で活躍するプロに学ぶ実践スキル—

### 科目1【施工計画】

日時：

2026年1月20日(火)

9:00~17:00

受付 8:45~

お申し込みはこちら



### 科目2【積算・仮設見積】

日時：

2026年1月27日(火)

13:30~17:00

受付 13:15~

お申し込みはこちら



この講習会は、建築CPD情報提供  
制度認定プログラム申請中。

#### 【2025年度版・内容大幅拡充】

#### 第一線で活躍する講師陣、増補改訂された最新テキスト

「施工計画」「仮設見積」の知識をアップデート&インプット!

毎年ご好評をいただいている建築工事实務講習会を、本年度は内容を大幅に拡充して開催します!

若手技術者の皆様からのご要望にお応えし、テキストは法令改正などの最新情報に加え、実務に役立つ知識を新たに追加した「増補改訂版」としてご用意。講義内容も基本からじっくり学べるようボリュームアップしました。

建設業界はもちろん、官公庁や設計事務所でスキルアップを目指す皆様に最適な講座です。講義スライドのデータも配布しますので、受講後の復習も万全です。この機会にぜひご参加ください。

※発熱・咳等の症状が見られる場合には、受講をご遠慮ください。



#### ◎アクセス

- ・地下鉄四つ橋線・中央線本町駅23号出口 徒歩約5分
- ・地下鉄千日前線・中央線 阿波座駅2号出口 徒歩約5分
- ・地下鉄長堀鶴見緑地線 西大橋駅1号出口 徒歩約5分

#### 開催概要

#### 科目1：【施工計画】

—品質・安全・経済性を両立する計画の要点を学ぶ—

施工計画は、品質を確保し、安全かつ経済的に工事を進めるための鍵です。本講座では、仮設から地下、躯体、仕上、設備に至るまで、適切な施工計画の要点を分かりやすく解説します。

日時：2026年1月20日(火)

9:00~17:00 (受付8:45~)

講師：浦瀬 誠 氏

(株)竹中工務店大阪本店

技術部企画管理グループ  
リーダー

講師：伊藤 維俊 氏

清水建設(株)関西支店

生産推進部上席エンジニア

受講料：16,000円 (テキスト代 税込)

#### 科目2：【積算・仮設見積】

—合理的で迅速な見積手法を身につける—

把握が難しく、つい単位面積や、請負金比率のみで処理されがちな仮設工事費。施工計画に基づいた合理的かつ迅速な見積手法を解説します。

講師：鄭 泰允 氏

(株)大林組大阪本店

建築事業部生産技術部

専門技術課 課長

日時：2026年1月27日(火)

13:30~17:00 (受付13:15~)

受講料：8,000円 (テキスト代 税込)

#### 共通事項・お申込み

会場：建設交流館 702会議室

大阪市西区立売堀2-1-2

TEL：06-6543-2551

定員：80名

資料：テキスト、PPT資料は当日配布

#### お申込み方法

公式ホームページ、E-mail、FAXのいずれかでお申し込みください。お申し込みの際は、以下の①~⑧の項目を必ずご明記ください。

- ①催し名「実務講習会」科目を明記
- ②受講者氏名 (年齢)
- ③事業所名
- ④受講票送付先住所
- ⑤担当責任者
- ⑥E-mailアドレス
- ⑦電話番号
- ⑧CPD単位申請希望者はCPD登録番号を明記

#### お支払いについて

1. お申し込み受付後、当協会よりお支払いに関するご案内をメールでお送りします。
  2. 内容をご確認の上、指定の銀行口座へ受講料をお振り込みください。
  3. ご入金のご確認が取れ次第、「参加証」をE-mailにてお送りします。
- ※振込手数料はご負担くださいますようお願いいたします。

#### ■申込先

(一社)日本建築協会 (担当：中内)

TEL：06-6946-6981/

FAX：06-6946-6984

E-mail：jigyoka@aaaj.or.jp、

https://www.aaaj.or.jp

## 日本建築協会東海支部主催 建築工事实務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供  
制度認定プログラム対象の予定です。  
(公社)愛知建築士会 (6単位)

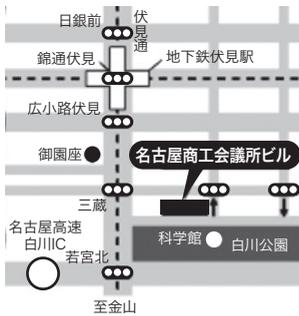
お申込みフォーム



### 講習会会場

〈名古屋商工会議所ビル〉

交通：地下鉄伏見駅(東山線・舞鶴線)下車(名古屋駅より東山線で1区間)5番出口より南へ徒歩5分



日時：2026年1月14日(水)  
9:30~17:00  
会場：名古屋商工会議所ビル9階  
愛知建築士会内  
(名古屋市中区栄2-10-19)  
定員：40名  
受講料：16,500円(含テキスト代 税込)  
※内消費税10% 1,500円  
※テキスト当日配布

### 申込方法

FAX・E-mailまたは左記QRコードの  
グーグルフォームにてお申し込みく  
ださい。

- ①講習会名
  - ②郵便番号・住所
  - ③受講者氏名・年齢
  - ④会社名
  - ⑤申込担当者名
  - ⑥電話番号・FAX番号・E-mailアドレス
  - ⑦受講料支払方法(銀行振込等)
  - ⑧建築CPD単位申請希望者はCPD登録番号とカタカナで氏名
- 受講料は前払制となっています。

銀行振込または現金書留にて送金お  
願います。受講料ご入金確認後、  
受講番号をE-mailまたはFAXで通知  
します。振込票を領収書とさせてい  
たします。受講料の払い戻しはいた  
しません。なお、日本建築協会東  
海支部HPから受講申込書のダウン  
ロードができますので、<http://www.aaj-tokai.jp> をご覧下さい。

■締切日 2026年1月7日(水)  
但し、定員に達し次第締め切ります。

### 趣旨と内容

- 官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の有能な技術者を養成する目的をもって標記講習会を開催します。
- 現場技術者の初級者を対象に、とくに取りつきにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
- また、都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では具体例により、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

### 申込先

(一社)日本建築協会 東海支部  
〒460-0008  
名古屋市中区栄2-10-19  
名古屋商工会議所ビル9階  
(愛知建築士会内)  
TEL:052-990-6410  
FAX:052-201-3601  
E-mail: [info@aaj-tokai.jp](mailto:info@aaj-tokai.jp)  
URL: <http://www.aaj-tokai.jp>  
登録番号(T4120005003412)  
※入金後、受講者を変更される場合は、事前にお知らせください。

### <振込先>

- 三菱UFJ銀行 栄町支店  
普通 0167157  
シャ)ニホンケンチュクキョウカイトウカイシブ  
一般社団法人日本建築協会東海支部

## 一步踏み込んだ先手の計画!! 9:35~13:25(休憩11:40~12:30) 施工計画

日吉 智紀 氏

清水建設(株)名古屋支店  
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが  
建築現場技術者の必須条件です。安全  
で、経済的な施工計画を解説します。

## 計画と一致した仮設費を!!

13:30~15:00

## 仮設見積

竹生 修治 氏

株大林組名古屋支店  
建築工事事務部建築生産技術第一課長

仮設工事費は、一般には非常に把握し  
にくい面があって、ついつい単位面積  
当たり、あるいは請負金比率のみで処  
理されがちです。施工計画に基づいた  
合理的で迅速な見積方法を解説します。

## 迅速かつ合理的な積算!!

15:05~17:00

## 積算業務

時武 治 氏

株竹中工務店名古屋支店  
見積部 建築3グループ長

見積業務のなかで基本となるのは数量  
積算です。この手順・基準を基本  
に、より合理的で正確な積算業務を  
解説します。

# 新しい足音が聞こえる

—想像した未来、創造する未来—

未来社会において、建築(またはその切り取られた部分やプロセスなど)はどのように進化してゆくのだろうか。勿論答えはないが、今とは違う価値観や意味をもつようになるのではないかと考えられる。既に建築はハードであるという考え方は終焉を迎え、ソフトや付加価値と結びついて、いかに新しい体験を提供できるかが重要になってきており、まだまだその考え方は進化してゆくに違いない。しかし、今私たちが感じている未来像は、不透明であり、不確定であり、真逆の方向性のものが共存したり、別々だったものが一体化したりと、様々な事が同時多発的に起こっている状態のように感じる。建築でいえば、例えば原点回帰して自然と一体化したり、逆に自然の一切ない空間でAIを駆使して癒される試みがあったりと、答えが一つではない未来に向かって、皆がそれぞれ仮説を立ててプロジェクトに取り組んでいるようだ。この「答えのない未来」という感覚は、一昔前と比べてより顕著に感じるようになってきているのではないだろうか。そこには漠然とした不安もあるが、一方で大きな期待感もある。不確定だからこそその実験場が今現在だと考え、人々の想像の一步先に行く未来を見てみようと、新しい発想で未来にチャレンジする人々がいる。おそらく彼らが描く未来像は個性的でアグレッシブで、千差万別であり、答えのない未来に様々な可能性を投げかけているのだろう。そういう発想が重なり合ってつくられる未来は、とても複層的で、多様性と魅力にあふれているはずだ。本特集では「未来の足音」が聞こえるような実験的なプロジェクトを紹介する。

12月号編集委員幹事 竹中工務店設計部 黒柳 亮

FILE 01	いしみらいラボ ●矢橋晋太郎	P20
FILE 02	ウッズスピーカーが未来をデザインする ●横濱金平	P24
FILE 03	「Re SHIMIZU-URA PROJECT」について ●いとうともひさ	P28
FILE 04	暮らしのなかにあった手しごとを、未来につなぐ ●内田将大	P30
FILE 05	屋台から繋がる人とまちの未来 ●今村謙人	P32
FILE 06	森のある暮らしを日常にするための実験室 ●久住一友 沖本雅章	P34
FILE 07	里山を100年先につなぐ ●中川悠奈 吉村 理	P36
FILE 08	五感を満たすメイドインジャパン「継承と革新」 ●芝 幸太郎 椿 邦司	P38
FILE 09	クリエイティブ領域におけるAI設計支援の進化と未来展望 ●若尾正仁	P42

企画 空間デザイン分科会 黒柳 亮/東実千代/今井充彦/河西孝平/神田健吾/佐々木琉偉/清水香澄/宗田菜々

特集表紙写真「棚田から見つめる先にある未来」撮影：佐々木琉偉

矢橋大理石・いしみらいラボ

SINCE 1901  
**YABASHI**  
 矢橋大理石株式会社



いしみらいラボ内観 コーディネートブース

## いしみらいラボ

矢橋大理石株式会社 専務取締役 矢橋晋太郎

### いしのみらいを考えたい

当社は建築用石材の調達、加工から施工まで、一貫して担う会社です。創業は1901年、西洋建築の導入とともに日本に石の文化が入ってきた時代でした。当初はマントルピースなどの製品を製造していましたが、やがて壁や床など建材としての石材も求められるようになります。それから120年以上にわたり、近代建築での石工事に携わってまいりました。

石の加工技術については西洋の設備機器を導入して効率化を進めましたが、色調や柄合わせについては、木目を合わせたり振り分けたりする木の文化に倣って日本独特の細やかさを取り入れました。結果として、世界でも類を見ない、日本独自の建築石材文化がかたちづくられてきました。

以来、石は建材として日本でもひろく一般的に使われる存在となりました。石の建材としての大きな特徴のひとつとして、むしろ建物が出来上がってからの風合いが徐々に街並みに馴染んでいくことがあげられます。月日を経た石の表情は、その建物と、その街並みの歴史そのものであり、人々の記憶としても継承されていきます。

しかしながら、残念なことに近年はその使用量が減りつつあります。どうしたらもっと石をつかってもらえるのか。そのためにはどう石の魅力を伝えればよいのか。そんな問題意識のもと、いしのみらいを皆で一緒になって考えるための場所として「いしみらいラボ」をつくりました。



いしみらいラボ外観

### 我々の仮説

石の使用量が減ってきた背景として、下地を含め重量が高むことと、天然材としての扱いの難しさがあるのではないかと我々は考えました。

いしみらいラボでは、それぞれの課題に対する我々の提案として、大きく二つの機能を持たせました。

まずは、石の重量を解決するために開発した「ユニマーブルパネル (uni Marble Panel, uMP)」の展示。もう一つは、石と他建材との取り合いをさまざまな環境で検証できるコーディネートブースを備えたことです。

## uMPと壁クリップ35工法の開発

石の重量については、様々な技術的なアプローチが考えられます。製品1枚を小さくすれば軽くはなりますが、施工の手間は逆に増えますし、意匠的な制限にもなるため問題解決とは言えません。

我々は厚みに注目しました。薄くすれば重量は軽くなりますが、ただ薄くしただけでは割れてしまいます。そこで我々は6mm厚の石を15mm厚アルミハニカム材と貼り合わせ、複合材とする手段を選択しました。複数の材料をひとつにしたという意味を込めて、「ユニ (uni=ひとつ)」マーブルパネルと名付けました。基本サイズは780mmx1160mm。アルミハニカムが裏打ち補強材として機能することで割れやすい石も比較的大きな寸法で使用が可能になります。重量も従来の乾式工法で一般的に用いる30mm厚の石と比べると半分以下となり、運搬、施工の面で大きなメリットが期待できます。

実はこのような複合材は従来から存在していましたが、一般に普及していませんでした。そのひとつの理由は、施工方法が確立できていなかったからです。接着剤を使った施工は可能ですが、施工品質の担保が難しいのです。

そこで、uMPの開発に併せ、金物を使った乾式工法である施工方法「壁クリップ35工法」を開発しました。

「壁クリップ35工法」では、アルミハニカム裏面に溶接されたアンカーナットを使って下地に緊結します。層間変位にはスウェーの考え方で動きに追従します。この仕組みが確立できたことで、接着剤を使わず、機械的に下地に留めることが可能となりました。吹き抜けのような高さのある部位に使っても安心な製品になったと自負しています。なお、不燃認定も取得しております。

## 建物の軽量化・工期の短縮にも寄与

材料の重量が半分以下になったことで、軽量鉄骨の下地にも施工可能となりました。結果として下地を含めた建築のコストと重量の低減、工期短縮に寄与できることとなりました。

石工事の職人は高齢化が進み、重い石の据付が年々厳しくなっているのが現状です。uMPを取り付ける「壁クリップ35工法」は、パネルが軽量となったことはもちろん、差し込み式の工法であるため、初段さえ決めれば施工が比較的容易なのも特徴です。将来的には職種や男女、年齢に限らず幅広い層の職人による施工体制への展開など、様々な可能性が期待できます。

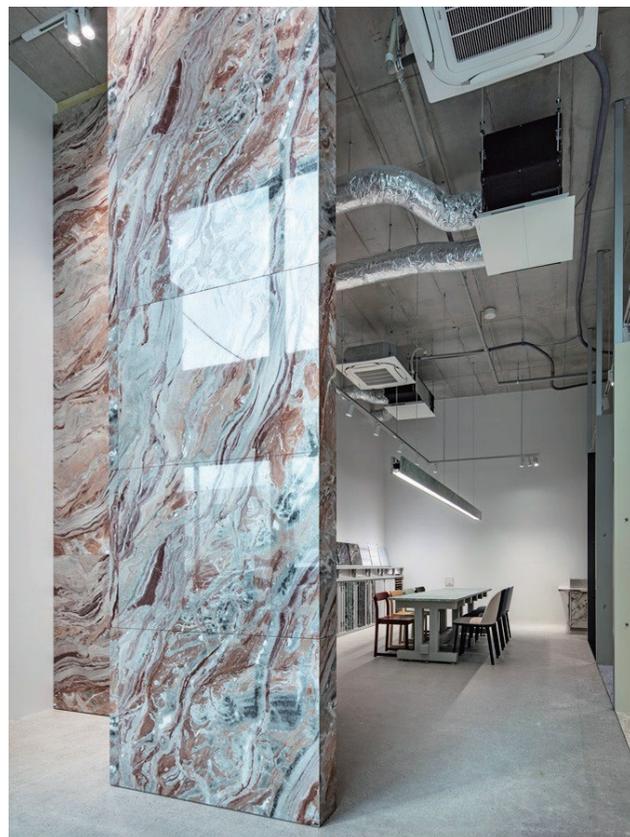
いしみらいラボでは、天井高5mの吹き抜け空間に、イタリア産大理石「オロピコロッソ」をuMP仕様で施工しました。ショールームを訪問された方は、まず大きな面の大理石壁の迫りに驚き、中に入って裏側の下地が軽量鉄骨で組まれていることに、また驚かれます。コーナーも張り合わせをすることで石が厚く見えるような納まりになっており、一目で石厚が薄い軽量な建材を使っているとはわからないよう工夫しています。

## 石と他の建材とのコーディネートができる

もうひとつの課題が、石の扱いの難しさ、つまり色調も柄も多種多様な天然素材である石をどう使っているのか、わかりづらいのではないかとことです。そこで、いしみらいラボの設計者である長岡勉氏、山本稜氏と「デザイナーとして使いたいショールーム」という目線を取り入れることにしました。何度もの打ち合わせを経て作りあげたのが「コーディネートブース」です。ブースは黒、グレー、ベージュ、ブラウンの4色のベースカラーで構成され、その中で様々なサンプルの色のコーディネートを試すことができる設えとしました。



いしみらいラボ内観①



いしみらいラボ内観②

石のサンプルはすべてuMP仕様で軽量につくられており、専用のブラケットで簡単に着脱できます。さらに石以外の金属や木材のサンプルも用意し、また家具類も取って色や素材の異なるものを集めました。これらを思い思いに組み合わせて並べ、簡単に空間を構成することで、設計者のインスピレーションが刺激されるような場所としました。もちろん、照明についても色温度と強度が変更できますので、商業施設やホテルなど、多様な用途を想定した環境の実現が可能です。



いしみらいラボ内観③



コーディネートブース使用例

## 課題

もちろんまだ課題もあります。まずuMPに使えるのは基本的に大理石、石灰石です。花崗岩の場合、製作自体は可能ですが、コストメリットが少ないため現実的ではありません。また、現在の仕様ですと建物内部使用を想定した製品です。仕上げも本磨き、水磨きなどに限られ、割肌など表情の出る仕上げは難しいです。

コストとしては、アルミハニカムを貼る分のコスト増はありますが、石を薄くする分、高価な石であれば逆にコストメリットが出ます。下地の簡素化も含めれば、総合的にはコストメリットが出ると考えています。

これらの課題をひとつひとつクリアしながら、まずは天然の石を実際に目で見て、使いたくなるような機会を増やしていきたいと考えています。

コーディネートブースの活用についても、まだまだこれからです。別の職種との協業も含め、どうしたら設計者が面白いと感じてもらえるか、引き続き試行錯誤していきます。

## いしみらいラボのこれから

このショールームを通じて我々が取り組んできたのは、建築における石の未来をどう描くか、ということでした（ひらがなにしたのは石のカタさを薄めたかったのです）。

石をどう魅力的に見せるか、はもちろん石屋としての我々としてのミッションですが、建築や社会、人々がこれだけ多様化した今日では、むしろ石が他の建材とどういった関係になるのか、をもっと意識しなくてはならないと考えます。例えば、石が主役ではなく、むしろ空間や他の建材の「つなぎ役」になる場合もあり得ると思います。

石は建材として主張が強い要素もありますが、空間に配置してみると、意外と納まってしまふ包容力もあり、それが天然材としての石の力ではないかと日々実感しています。その特徴を活かすため、いしみらいラボは、石だけにとどまらない、もっと開いた使い方をしていきたいと考えています。そんな思いで「ラボ」と名前を付けました。ここでは、石に限らず、他の建材を紹介したり、ワークショップを行ったり、いろいろな実験的な取り組みをしながら、いしのみらいを考えていく場にしていきたいと考えています。



ワークショップの様子（東京造形大学室内建築長岡ゼミ）

矢橋晋太郎（やばし・しんたろう）

矢橋大理石株式会社 専務取締役

建築石材シニアアドバイザー

1977年岐阜県生まれ。慶應義塾大学 政策・メディア研究科 修了。大手ディベロッパー勤務後、矢橋大理石株式会社入社

2024年より現職。好きな石はトラヴァーチン





「木音」が使用されているギャラリー（ロイヤルパークホテルアイコニック名古屋）

## ウツドスピーカーが未来をデザインする

株式会社山の加工場ネットワーク 研究開発者 横濱金平  
 インタビューアー：竹中工務店 黒柳 亮

三重松阪に、発明家と呼ぶにふさわしい人物がいる。いくつかの特別な特許を持っている横濱金平さんは、松阪城跡にほど近い御城番屋敷にアトリエを構えている。木板そのものがスピーカーとなり、美しい音（発生源が板そのものなので音源の感覚がスピーカーとは異なり柔らかい）を奏でるシステムをつくっている。アトリエのテーブルからも音楽が聞こえ、心地よい音に包まれながらインタビューを行った。意外にも、木材スピーカーのアイデアは横濱さんが1997年に立ち上げた「山の加工場ネットワーク」にてマンション内装材を開発し、10年で納入実績3000戸・2年点検クレームゼロを達成した経験からはじまる。建築材料の共鳴現象（共振）はクレームに繋がるが、そこを突き詰めたおかげで小さなエネルギーも増幅するという気付きがあり、上手に使えば逆にウツドスピーカーでは心地よさになるのではと考えたという。モーツアルトの時代の木のピアノ、音楽ホールの響き、音は波であり粒子である事とか、一見別々の事象である様々な点が線でつながったとき、閃きに繋がった。しかし、音響の知識があるわけではなく、最初は何をやっても失敗の連続であった。9割以上の失敗と紆余曲折を経て、ピンポイント駆動を生み出したことから道が開けてきた。手作りの技術でありながらも、繊細で緻密な独自システムによって繊維構造である木材が共振することで、美しい音が生み出されることを発見した。そして音響の先生方からすれば摩訶不思議なその技術を理論構築し特許取得をした。ここまで聞いただけでもその開発への拘りと道のりに感嘆するばかりである。そしてギャラリーにて実際のウツドスピーカーの音を聞かせてもらおうと、なんとも心地よい不思議な感覚に包まれる。

## 大阪・関西万博のシグネチャーパビリオン「Dialogue Theater—いのちのあかし—」



奈良県川上村の樹齢400年杉で製作した8台の「木 KION 音」

本年の大阪・関西万博にて、映画監督の河瀬直美氏がプロデュースしたパビリオンにこのスピーカーシステムを使い、話題になった。パビリオンコンセプトは「対話を通じて、世界の至る所にある分断を明らかにして解決を試みる」こと。奈良県十津川村旧下立中学校、京都府福知山市旧細見小学校中出分校という二つの廃校を解体、再建築した会場には奈良県川上村の樹齢400年杉板8枚の「木 KION 音」が設置され、吉野の森400年の記憶を宿した固有の音を響かせ、毎日異なる“初対面対話”がなされた。この製作体験からウツドスピーカーは様々な角度から「SDGsデザイン」に通じると再認識できたという。生理人類学の視点、物理的な機能性を示すデータ、科学的な木材の解析、そして国産材の使用による山の循環など、語られる横濱さんの視点全てが「SDGsデザイン」に結び付き、ウツドスピーカーの展開を後押しする。

# 音響専門家の評価・・・距離減衰の少ないシステム

一どのように製品化を進めてきたのでしょうか。

個人で進めてきたものなので、事業化を考えると重要なのはエビデンスであった。令和元年3月にウッドスピーカー「木-KION-音」の事業化を前提とした評価試験を浪花千葉音響計画有限会社に委託し某研究施設内の体育館木造舞台（高さ1メートル×幅12メートル×奥行4メートル）にて距離減衰とその周波数特性（舞台床下スピーカーを用いた結果）を計測した。そして令和2年3月に試験結果と共に全工程管理記録の考察が報告され、考察の冒頭で興味深い一文が添えられた（以下より本文を引用する）。【理論上の距離減衰特性に当てはまらず、遠くまで音が減衰せず伝達していた。今回の音源の振動板は体育館舞台の床面と、舞台枠の立ち下げ部の引き違い扉まで音源の振動板として体育館のアリーナ空間に作用していると考えられる。この大きな舞台床面による振動板は振動面が天井を向いた上下方向の駆動となるため、アリーナ客席側の測定点（受聴点）に対しては90度方向であり寄与しない面となる（コサインの法則）が、舞台床面より形成された大きな面積であることから決して無視はできない。また、舞台枠立ち下がり部の引き違い扉の寸法は高さが約1m、幅12mであり、この寸法により、直近では面音源の特性、線音源を経て点音源になると推定される。よって、通常の点音源よりも距離減衰がしにくいという傾向であったと考えられる。ここで重要なポイントは点駆動スピーカーユニットが（従来の振動板を持つスピーカーユニットとは異なり）固有の振動板を持たないことである。取り付けた建築材料や板状材がその振動板である。この大きさや材質、板厚、裏の支持材の構成方法によってその音響特性は大きく変化することが想定される。この代表的な材料構成等の確認をとっていくことがポイントになる。・・・中略・・・点駆動スピーカーユニットの1台、2台、3台、4台連結の周波数特性の違いについて、全シリーズを直列・並列・パラレル接続の特性比較をした。結果は全シリーズ直列接続時は高音域の特性劣化が生じ、直列・並列併用接続では高音の特性劣化が軽減された。・・・スピーカーの周波数特性を確認すると・・・高音域の低下は見られるものの極端ではなく低音と高音の強調された双こぶラクダ型特性パターン（この比喻は一般化されている）の特性は依然として健在である。・・・聴覚上においても、明らかにシリーズパラレル接続時の方が聴きやすく自然で素直な音の印象を感じた。】

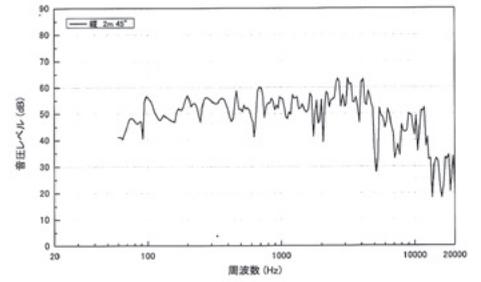
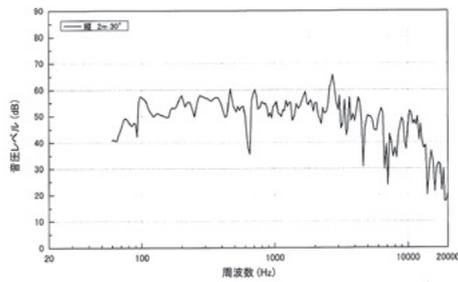
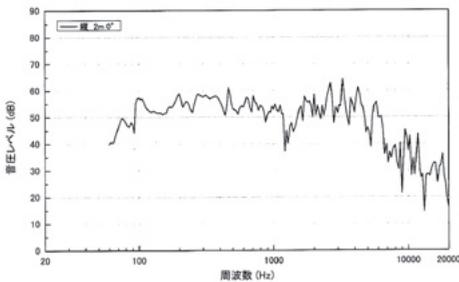


図3 周波数特性測定結果（設置：縦、測定距離：2m、測定方向：0°） 図4 周波数特性測定結果（設置：縦、測定距離：2m、測定方向：30°） 図5 周波数特性測定結果（設置：縦、測定距離：2m、測定方向：45°）  
測定方向別の周波数特性データ

このエビデンスを得たことによって、自分自身この技術を正確に社会に伝えることができるようになったと言える。得られたデータと知見を基に、点駆動ユニット（マザーボード）を開発し、JAPAN SHOP2024 NIPPON プレミアムデザインIDM ブースに出展、マザーボードは1次振動、建築の床・壁・天井・カウンター側が2次振動となるウッドスピーカーシステム「音響建材」としてリリースした（特許取得済み）。そして何か眉唾で不思議な技術？と思われがちだったが、公共事業や万博、最先端の計画にお呼びがかかるようになった。



「木音」マザーボード



松阪のアトリエで語る横濱氏

## 「音の鳴る階段」で進化する音響空間

最近、非常に面白くチャレンジングなプロジェクトがあった。しかもそれは山梨県身延町からの公共事業のお声がかけて、町に直接プレゼンテーション、デモンストレーションを行い、やってみようという事になった。身延中学校の玄関を入った正面の「木の香ホール」の階段踊り場を建築工事の内装材残材で製作したマザーボードで音響化、階段そのものがスピーカーとなった。使用した木構造材は身延山久遠寺から寄附された「身延山久遠寺境内の樹齢100年杉の原木丸柱」、内装材は久遠寺の森林から伐採された間伐材で製作した。空气中を伝わる「音波」とボンコンダクションと呼ばれる直接振動が聴覚系に伝播するので、難聴者にも聴きやすい音になる。一方向からの音では届けきれない音を、均質に近い形で空間に音を届けることができるという特徴から、近未来の難聴者社会が懸念される社会問題解決に向けた音響空間といえるのではないかと考えている。

## ウッドスピーカーSDGsデザイン×Stories

ウッドスピーカーは未来都市を想定し、社会に広まってゆくことを望んでいる。実際に某未来都市計画にも採用されている。「木音」は無垢木材のマザーボード（1次振動）を主とし、2次振動側（床・壁・天井・家具）は選択の自由度が高いので、設計者の意のままに独創的な音響空間の創出が可能となっている。マザーボードは柾目木材で形成され、音響振動板は木材を基本としながら複合材料（不燃構造）に対応できるので、空間そのものを音で包み込むことが可能になる。そして、建築残材の再利用、家具や建具の再利用、除伐材の利用、ダメージを受けた森林の樹木、製材時の端材の活用（右写真：設計者の意向で製作した音響振動板）などからSDGsデザインとして様々なStoryを生み出せる。又、リノベーションでは建築物の記憶、家族の記憶、森の記憶を響かせ、木材の再利用を繰り返すことができる循環型社会に柔軟に応用できるものとなっている。木材そのものを分子レベルで活用できる未来の技術であり、「植物化学で豊かになる未来社会」が想像できる。

## 100年単位で循環する森林資源の未来

日本の森林問題は、戦後植林され荒廃した姿がクローズアップされている反面、手入れされた森林の樹齢100年以上の杉資源としては充実してきている。用途がなくなった杉の弱点を物理的に克服した「表層圧縮木材」で広葉樹と同等の強度を持った杉材が商品化された。この杉材には硬度が高い木材の音響特性があり「木音」の高音特性劣化が改善され高音域が安定することが分かった。この進化した杉表層圧縮木材を利用することで、森林資源の循環サイクルを生み出すことを期待している。

—ここまでインタビューしても、話はまだまだ尽きない。目指す未来は？と横濱さんに聞くと、建築は人にやさしくあってほしいと言われた。人が心地よいと感じるもののひとつが音環境であり、空間そのものを鳴らすと、音を耳だけでなく体で感じることができるという。それは心地よさを生み出すと同時に、的確に音を届けるという防災的利点があったり、難聴者に聞き取りやすい放送を実現したりと、様々な可能性がある。音を体で感じることが当たり前になる未来を想像しながら松阪を後にした。夕暮れの古城跡と、語られた近未来のコントラストが印象的であった。（聞き手：黒柳 亮）

山梨県身延町立見延中学校 階段そのものがスピーカーに



左からカフワアーキテクト御山隆治氏、町職員担当者、設計事務所担当者



プロジェクトの出力音声、どの場所でも同じように聞き取れるよう音響設計された会議室



見延町の木材を確認する横濱氏（中央）



横濱金平（よこはま・きんぺい）

1951年生：建築と工業デザインを学びインテリアデザイン事務所勤務を経て独立、得意分野はデザインサーベイ。1990年代から林業政策と生産現場のズレに危機感を抱き森林に寄り添う活動を開始。2005年頃から木材スピーカーの研究開発（特許権取得）に取り組み現在に至る。



# KINPEI



(上段左から) 1 天井面音響化作業 2 杉大径木の製材木取り 3 名古屋アイコニック・ホテルの「木音」製作作業 4 未来都市「実証実験住居棟」メインダイニングテーブル音響化作業  
 (中段左から) 5 伊勢神宮境内の杉が伊勢湾台風で倒木した樹齢300年以上の御山杉 6 春日杉の表層圧縮木材 7 音響評価試験 8 点駆動ユニット第1号試験機 9 御城番屋敷の工房外観  
 (下段左から) 10 奈良県川上村樹齢400年森 11 スピーカー「葉音」 12 ウズクリ手作業 13 音響化したBARカウンター 14 樹齢100年～500年杉集荷・製材・検品・積積み・天然乾燥作業



アトリエ  
三重県松阪市

株式会社社の加工場ネットワーク  
 研究開発者  
**横濱金平**  
 松阪市殿町1385番地御城番屋敷  
[yokohama@kinpei.jp](mailto:yokohama@kinpei.jp)  
<http://kinpei.jp>



音響建材常設展示体験場  
東京都中央区

音響建材「木音」運営：カフワアーキテクト株式会社  
 代表取締役・クリエイティブコーディネーター  
**御山隆治**  
 東京都中央区八丁堀3-11-12 Floor and Walls 6F  
[ryuji.miyama@qahwa-architect.com](mailto:ryuji.miyama@qahwa-architect.com)  
<https://qahwa-architect.com>



## Re SHIMIZU-URA PROJECT



左上：山下商店 左下：Now on air 右上：チャイとコーヒーとクラフトビール 右下：お好み焼き屋

## 「Re SHIMIZU-URA PROJECT」について

株式会社いとうともひさ 代表取締役 いとうともひさ

建築が立ち上がることは結果であり、そのプロセスである暮らしに焦点を置き2017年よりプロジェクトを進めている。現在は纏まった16軒の空き家を取得、管理を行なっている。冷水浦（しみずうら）集落には187世帯327名（2025年4月）の住民が暮らししており、昔は漁村集落として10軒以上の網元で賑わっていたが、現在網元は1軒となり漁村としての機能は衰退しつつある。過疎化しつつある漁村集落に何が必要でどのような機能があれば集落の暮らしはより良いものになるだろうか。そんなふとした疑問からプロジェクトをはじめることとなる。

そもそもより良い暮らしとは何であろうか。安全・安心に暮らせる建築があり、豊かな食があり、文化的な服飾で毎日を彩る。そして毎日充実した作業があり、身の回りの環境を愛でて互いに必要とし合い、喜びを分かち合う。そんな毎日の積み重ねではないかと私は考える。それがこのプロジェクトの目指す地点である。

### 建築は家事であり終わらない活動である

掃除、洗濯、炊事に加えて建築を行うことは家事になり得るというのをこのプロジェクトを通して実践している。起床後、自分たちの作った集落のカフェに集まり、温かい飲み物を飲みながら1日のミーティングを行った後作業に取り掛かる。2022年に喫茶店「チャイとコーヒーとクラフトビール」がオープン。2023年に雑貨屋「糸と手芸（現在は山下商店）」がオープン。2024年に定食屋「お好み焼き屋」がオープン。そして2025年10月18日にはレコーディングスタジオ「Now on air」がオープンした。毎年一軒ずつを目標に1年を通して建築行為を継続的に行なっている。資本に裏付けされた商業空間のつくられ方を維持する事は現在この集落では難しい。資本のためではない継続した建築行為を行うことでこの4年間は毎年お店が増え続けている。最近では私たちが行うこのような一連の建築行為がまちづくりであると評価していただくことも多くなってきたが、あくまで家事としての建築行為の積み重ねがお店を増やすという結果に繋がっている。



建築の日々。毎日少しずつやれることが増えていく

まちをつくるという感覚ではなく、あくまで毎日家具を作ったり、建築を修繕することを積み重ね実践した結果が今の冷水浦の様子なのである。

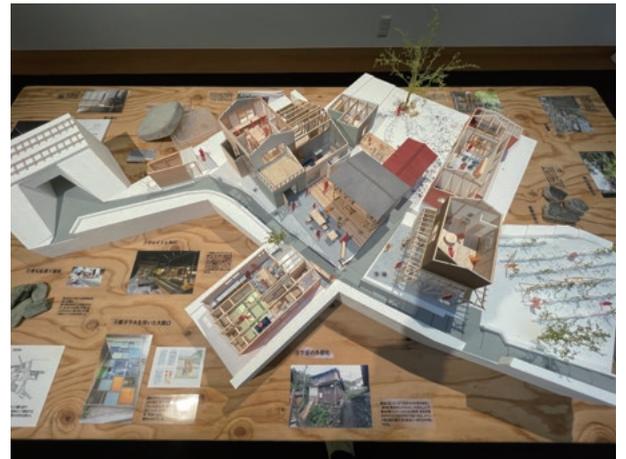
Re SHIMIZU-URA PROJECTで特徴的なのが建築の手伝いをしに来た学生であろうと一般人であろうと僅かではあるが、給与が発生すると言うことである。多方面から学びに来る人についての給与の支払いは不要ではないかと言うアドバイスをいただくが、ここは2017年プロジェクト当初から変わらず一貫して支払いを続けている。それは何故かと言うと継続的な建築人材の育成が社会にとって最も重要と言っても過言ではないからである。事業として当プロジェクトを考えると収支は不安定であり推奨されるものではないと思うが、これはある意味プライベートな問題も孕んでおり、いとうともひさ個人の願いを体現している。人を資本とみなす人的資本経営ではなく、もっと緩やかな発想を取り入れている。ある意味での建築的ベーシックインカム実践に近づいていると感じるこの頃である。過疎地域での建築実践を考えると、このように持続可能な建築スキームを行うことのメリットは大きい。最も大きな効果は過疎集落にも建築を通して魅力的な雇用が生まれること、例えば地方では魅力的な雇用が見つかりづらく、都市部に優秀な人材が流出する事例が見受けられるが、魅力的なまちを作るための建築行為というのはクリエイティブな活動であり雇用としても魅力的であろう。

## 計画と無計画の狭間で住処を考える

もう少し具体的に建築の作られ方の話をしようと思う。中長期的な計画は5年に1度行う。2017年から2022年の5年間はPERSIMMON HILLS architectsと共に計画を策定した。2023年から2028年の5年間はミンガヤコレクティブ+山下大地との同計画が実行中である。この際の計画が2023年鹿島出版会のSDレビューにおいて朝倉賞を受賞することになった。計画すると言う意味では、こうして設計事務所が顧問契約的に集落の計画に関わってくださることが有用な方法である事は実証されたのではないと思う。内部に住む私たちは、この計画をなぞりながら、時には状況に伴う計画変更も行いながら形にしていく。この集落で暮らしている当事者である私たちにとって、与えられた計画と言うのは、貴重な指標ではあるが、実行しなければいけないと言う強制力のあるものではない。あくまで暮らしていく生きていく上でのプロセスの手がかりになるものである。

最近では、冷水浦プロジェクトの店舗数が増えるに従い、都市部からの体験希望が増加傾向にある。参加を希望して下さる皆さんはとても優秀な方が多いが、あいに受け入れる数が限られているのでお断りするケースもしばしば見受けられる。地域にとっては願ってもない機会である。店舗が継続的につくられ続けて4年目になるが、この先々さらに店舗が増え続ける予定である。建築的にもこのまちとしても、どのような場所になるのか。想像もつかないが実践の中に答えがあるのではないと思う。プロジェクトは2017年7月に始まり9年目に入った。

しかしまだプロジェクトは始まったばかり。この集落での建築実践はこの先も長く続く予定である。



模型やスケッチを用いて計画は行方が無計画性も大切



週末はお好み焼き屋で打ち上げ



Now on air (スタジオ) ではラジオ収録も行われる

いとう・ともひさ

- 2008.3 神戸芸術工科大学 芸術工学部 環境デザイン学科卒業
- 2015.4～ 株式会社いとうともひさ 代表取締役
- 2017.5～ 和歌山県海南市冷水浦漁港にてRe SHIMIZU-URA projectを運営
- 2020.4～ 千葉県館山市にて特定非営利活動法人ゴンジロウ 代表理事
- 2023.4～ 東京大学非常勤講師

## 「BOLOCO®」プロジェクト



## 暮らしのなかにあった手しごとを、未来につなぐ

株式会社ムラシゴト 代表 内田将大

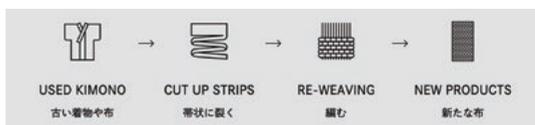
## 「日本で最も美しい村」原村

長野県の八ヶ岳西麓に位置する高原の村、原村（はらむら）。標高900~1,300mに約8,000人が暮らしており、全国57町村が加盟する「日本で最も美しい村」連合の一つでもあります。年間を通して晴天日が多く、360°開けた山々の風景のなかで生産される高原野菜「セルリー（セロリ）」や、1980年代にブームとなった「ペンションビレッジ」が観光・地域資源として存在する村です。

東京からほど近い（電車や車で約2時間半）の避暑地として、1976年から約50年間、昨今では“子育て世代”や“老後”の住処として、移住者の増加（社会増）により毎年人口が増え続けている非常に珍しい自治体でもあります。

## 暮らしのなかにあった手しごと「裂織」

この地域で昔から行われてきた、冬の農閑期の女性の手仕事「裂織（さきおり）」。「方言でぼろ織り（ばたおり）」とも呼ばれる寒冷地特有のこの技術は、かつて布が貴重だった時代にすり切れるまで服を大切に使い込み、どうしても使えなくなったときの最後の手段として、帯状に裂いてよこ糸に再利用して厚手の手織り生地を織りあげる、生活に根差したアップサイクル文化です。この“古くからの知恵”を伝統的なものとして保存するだけではなく、その可能性を拡げることを目的に、2024年に裂織ブランド「BOLOCO®（ボロコ）」を立ち上げました。



裂織制作の流れ



ひとつひとつ手作業で織りあげていく

## 「手触り感」を求めて都市から地方へ

この取り組みを紹介する前に、筆者の背景からお話したいと思います。

約10年前、大学院で建築・まちづくりを学んだ後にゼネコンに就職し、東京都心の再開発案件に参画してきました。都市開発担当者として、顧客・行政・社内そして地域の間で立って、街をつくっていくプロセスは非常に刺激的で充実した毎日でした。一方で、ヒューマンスケールを超えた開発にはどうしても「手触り感」が少なく、想像していた“まちづくり”とのギャップに違和感を覚えていました。

この違和感の原点には、幼少期の英国・ロンドンでの滞在経験があります。父親の仕事の都合で10-14歳まで滞在したこの国では、ナショナル・トラストが保全する庭園や伝統建築、コッツウォルズ地方ののどかな風景、数々のアンティークマーケットなど、ほぼ毎週両親に連れてもらったことを今でも鮮明に覚えています。特に、築数百年の家に住むのが当たり前で、歴代オーナーの思い出が随所に刻み込まれた古い不動産ほど価値が高まる文化に大きな魅力を感じ、これがきっかけで建築の道を志したほどです。

今日の都市開発に関して、経済・防災面で良い影響も勿論あり、決して全否定的な姿勢ではありません。ですが、結果的には「やっぱり、自分の考えるまちづくりを追求したい」と考えて前職を辞め、2022年に地域おこし協力隊として長野県原村に移住。2024年に株式会社ムラシゴトを開業し、裂織をはじめとする地域資源を活用したビジネスをスタートしました。

## 「BOLOCO®」プロジェクト

このような背景のなか、各家庭内で行われてきた裂織をテーマに、オリジナルプロダクトの企画・販売、BtoBの商談会への出展、古布や古道具の回収、制作・体験工房の建設・運営などを事業として行なっています。ここで、BOLOCO®プロジェクトの一例をご紹介します。

### ー 1. 都市で棄てられる布を地方で活用し、世界へ届ける「シーチング・シリーズ」

一般的に、服飾専門学校では仮縫い用の生成り生地「シーチング」が燃えるごみとして大量に棄てられます。シーチングは元来シーツ用につくられた薄手の安価な生地で、ドレスなどを制作する際の型紙制作後の仮縫い段階で用いられます。本縫いでは、シルクなどの仕上げ生地に置き換えられるため、仮縫いで作ったシーチングは廃棄されがちです。建築界隈のトレーシングペーパーと同じような存在です。

この大量に捨てられるシーチングを大阪の服飾専門学校と連携して回収し、ダンボール箱いっぱい詰めて定期的に村へ届く体制を構築しました。厚みや色で仕分け、水洗いして裂き、手間暇かけてよこ糸にして、カラフルなたて糸をかけた織り機で織ります。これが、BOLOCO®第一弾の「シーチング・シリーズ」です。

### ー 2. 築100年の古民家を「泊まれる工房」に

原村役場の近く、古民家が立ち並ぶ“農村エリア”のど真ん中に立つ空き家を改修した「タヌキハウス」。前住民の逝去後、12年間家財そのまま+ツタだらけの状態、直す余裕はないけど心を痛めていた現オーナーの想いを受け、2025年春に周辺住民や地域おこし協力隊の手を借りながら「まずは残置物の片付け」からスタートしたプロジェクトです。

建物は、諏訪地域の八ヶ岳山麓、寒さの厳しい環境で見られる「建てぐるみ」の形態。母屋が土蔵を抱きかかえるように配置する民家のことで、冬の出入りの利便や火災から守ることを目的に、土蔵内には当時貴重だった米や布が保管されていたようです。2025年10月に当物件を裂織の制作・体験工房として開業しつつ、収益用途として部屋貸しも兼用しています。地域づくりに場づくりは必須であり、建築士の知見がここで生かされたと感じる瞬間でした。

### 「小さなアップサイクル」がつくる未来

昨今の環境意識の高まりに伴い、アップサイクルプロダクトを目にする機会が増えたように感じます。一方で、「棄てられるものをつかえば良い」という風潮も一部存在するよう感じています。例えば、捨てられる衣類を遠い異国からコンテナで運び活用する例などは、どうしても大きなエネルギーと資本が必要になります。輸送コストやプロダクト時のCO<sub>2</sub>排出量など、ライフサイクル全体で捉えた場合に「真に」循環型社会に貢献していると果たして言えるのでしょうか。

これに対して、手しごとをはじめとする「小さなアップサイクル」は、一人から取り組める手軽さと「資源が地域内で循環する」ことが特徴で、エネルギーロスは非常に少ないです。ただし、ロットが極少量になること、社会的インパクトが限定的なことなど、持続性とマネタイズの難しさが最大のデメリットだと感じます。実際、裂織の場合、制作コスト・手間が膨大、手作業でスピードがゆっくり、大きな需要に対応できないなど、黒字化の道は程遠いと日々痛感しています。

幸いにも、先般東京での商談会に出展してから、百貨店・セレクトショップからの引き合いや連携の相談を多く頂いています。本当に小さな取り組みですが、共感いただく方や企業が確実に増えていると実感しています。こうした「小さなアップサイクル」こそ、未来を少しずつ変えていくのかもしれない。



内田将大（うちだ・まさひろ）

株式会社ムラシゴト 代表 長野県原村在住、東京都出身、一級建築士/宅建士

幼少期をロンドンで過ごし、古いものを大切にす文化に感銘を受けて建築の道を志す。大学院で都市計画や地方の街づくりに関わり、ゼネコンで都市開発の仕事に従事。かねてから夢だった地域づくりの仕事に携わりたいと考え、原村の地域おこし協力隊として2022年に移住。現在は地域プロジェクトマネージャー（原村第1号）として一般社団法人原村観光局の理事/事務局長を務めるかわら自ら起業し、原村に伝わる裂織（さきおり）ブランド「BOLOCO®」の推進や、空き家改修などを行う。



上) 一般的に廃棄される仮縫い用の生地「シーチング」  
下) シーチングを横糸に用いた「BOLO PLACEMAT」



古民家を改修し、泊まれる工房として活用



BOLOCO®プロダクト



屋台の学校プロジェクト参加者との集合写真 ©三宅愛子 (kiwi)

## 屋台から繋がる人とまちの未来

カモメ・ラボ代表／合同会社ルツボ代表社員／橋ノ上ノ屋台共同店主 今村謙人  
 インタビュアー：株式会社安井建築設計事務所 清水香澄

屋台という仕掛けを通じて、人と人、人とまちを繋ぎ、まちの未来を楽しくするような活動をされる今村謙人さんのお話を伺いに、築港ターミナルへ訪れた。当日の築港ターミナルでは「屋台のみなとプロジェクト」が開催されており、今村さんは講師として、二日間に渡って屋台づくりから出店までを行うワークショップが行われていた。ワークショップ二日目となるインタビュー当日は、朝から個性豊かな屋台が賑やかに出店の準備を進めていた。

———「屋台のみなとプロジェクト」では、どのような活動をされていますか。

今回のワークショップは、建築学生向けのキャリアサポートやコミュニティスペースを運用などされている(株)キャリア・ナビゲーションさんから、屋台を使って港区の街づくりをしていきたいという話をいただいて参加しています。これから港区で屋台を使ってくれる建築系の学生さんたちを中心に、港区で活動する人や屋台での活動に興味のある滋賀県の医大生などいろんな人が参加してくれていて、港区の区長さんもプライベートで屋台を出店されています。ワークショップ一日目の昨日はみんなで屋台を作って、二日目の今日は大阪駅周辺の方へ移動しながら、自分達で作った屋台を使って出店するところです。屋台のプロジェクトをやっていると、自分のお店は持っていないけれど何かやってみたいという人達が参加してくれることが多くて、ちょっと変わった面白い人達との出会いが面白いです。

## 屋台の学校プロジェクト

———屋台作りから出店までを行うワークショップ「屋台の学校」を始められたきっかけを教えてください。

僕自身、屋台を自らやっていたこともあり、初めは屋台を作って欲しいと頼まれて屋台の販売をしていました。そうすると、屋台自体が商品だから自分で



屋台出店の準備でにぎやかな築港ターミナル



まちなかへ移動する様子

メンテナンスしなくなるようで、タイヤの空気が抜けた時にも僕のところへ修理の依頼が来るようになっていました。屋台を使う人が自分で屋台をメンテナンスして、アップデートできるようにした方がいいと思い、屋台を売るのではなく、一緒につくるようになったことが「屋台の学校」を始められたきっかけです。ただ、作るのが結構大変なので作って満足して使う方へ繋がらなかったり、屋台を使ってどうアップデートしていくか分からないという話もよく伺っていたので、屋台を作った翌日出店デビューしてもらって、使ったその場で悩みや相談をすぐ共有できるようにしよ

うと考えました。そこから屋台作りと屋台出店を二日に分けて行うワークショップを始めました。屋台は一人でやり始めると結構緊張してしまうのですが、一回みんなで一緒にやると、楽しいし、コミュニティもできる。続けていくのにも、コミュニティが無いとなかなか続かないので、そういった人の繋がりがりづくりもワークショップでは兼ねています。

———今回は大阪の港区での活動ですが、他にどのようなところで屋台の学校をされていますか。

全国いろんなところで開催しています。そのエリアでコミュニティをつくってくれていると、参加者がすぐに集まりますが、コミュニティが無いとなかなか集まらない場合もあります。屋台をやりたい人はアウトプットして実践したい人です。ものを作っていたり、自己表現したい人達、そういう人が屋台を通していろんな人と繋がったりしていています。必ずしも誰かと繋がる必要もないですが。

## インプットとアウトプットのサイクル

———何かやりたいという気持ちがある一方で、私自身もなかなか実践まで至らず、消費ばかり続けているとなんだか疲れたと思うことがあります。

人間ってご飯を食べた後に排泄するというサイクルがあって、そのサイクルと同じように、情報も取り入れたら出す必要があると思っています。そういったサイクルがないとお腹がいっぱいになっちゃう。だから、消費することに疲れるというモヤモヤは健全だと思います。今は寝転びながら携帯を見ている、簡単に情報を得られる世の中だから、みんなインプットから始めてしまう。むしろ、逆にアウトプットして必要な情報を取りに行くことをお勧めしたいです。何かやってみるから疑問を持つし、悩みが出てきて、本を読んだり、旅に出て新しいものを意識的に見るようになる。アウトプットって気軽にやりにくいのですが、屋台だと割と気軽にできるのかなと思います。

## 形にこだわらないでやってみる

———今村さんは日本だけでなく海外旅行中の旅先でも屋台をされた経験があると思いますが、海外で屋台をやった時のことをお伺いしても良いですか。

海外で屋台をやったきっかけは、旅のインプットに飽きちゃったから何かしたいと思い立ったことでした。屋台と言っても、旅先だったので宿にあった座卓を路上に持って行って、正座しながら焼き鳥を売るようなスタイルでした。形にこだわるよりも、まずは自分ができる範囲でやっちゃえばいいと思えたから、思い切って実践できたのだと思います。路上に出るときは緊張したのですが、一緒に旅をしていた知り合いが映像を撮ってくれると言ってくれて、イベント的にできたということも、挑戦できた理由かなと思います。屋台のワークショップもいきなり路上に一人で出ていくのは難しいので、最初はイベント的に路上に出るきっかけを作って、そこから日常に繋げていくことを考えています。

あと、屋台で出店する時は、交通の妨げにならないとか、周りのお店に迷惑を掛けないこと、嫌な気持ちにさせないことを周知しながらやっています。今日はお店の前で屋台をやってもいいと許可をいただき、お店の前の空間を貸してもらいました。法律や街のルールで問題ない場所でも、結局、嫌われていたらできないところもあるので、自分も楽しみながら周りにも気をつかう工夫が大切だと思っています。

あまり見た目とか形を気にせず、一回やってみると見えてくるものがあると思います。一度あの子供たちに混ぜてやってみてはどうですか。



今村さんと医大生の出店者  
サイコロを振って出た目の話題をするふれあい屋台



左から、スピードキューピングの実演とZINを売る親子屋台・本のタイトルは伏せたまま店主の感想で選ぶ本屋・港区長の日本酒スタンド



今村謙人 (いまむら・けんと)

1985年生まれ。大阪市立大学大学院修了。新卒で入社した設計事務所を1年でクビになり、内装や工務店、飲食店などの職に就く。夫婦で世界一周の新婚旅行をした後、大阪へ。現在は大正区を拠点に、屋台づくりや出店のほか、社会実験などのプロジェクトやイベント企画など幅広く手掛ける。新たに「屋台の学校」もスタート。編著『日本のまちで屋台が踊る』刊行。



編著「日本のまちで屋台が踊る」が11月より新版が発行。

QRコードから本書の紹介ページをご確認いただけます。

森ある暮らしラボ



森ある暮らしラボ



室内に水路が流れ、光と風と音が訪れた人々を優しく包む 設計施工・株式会社 崑三郎 / 写真・山田圭司郎

## 森のある暮らしを日常にするための実験室

執筆／森ある暮らしラボ 久住一友  
 執筆／株式会社 崑三郎 代表 沖本雅章  
 インタビュアー：畿央大学 東実千代

森のある暮らしを日常にするための実験室として、かつて建具屋だった建物を改修して森ある暮らしラボ（通称：森ラボ）は始まりました(2017年)。シェアアトリエや みんなの図書館、森の活動の拠点にもなっており、《森ラボ》は建物の名称であるとともに、取り組み全体の総称でもあります。



土間のある空間に並ぶ本棚 各本棚オーナーの個性が光る

### みんなの図書館のしくみを取り入れる

久住一友

森ラボを、より開放した場所にしたと考えていた頃に本屋で手に取った《わたしのコミュニティスペースのつくりかた（ユウブックス）》。土肥潤也さんが始めた《みんなの図書館》の取り組みを知り、森ラボにも取り入れることにしました。区切られた本棚には、それぞれ本棚オーナーが選書した本が並んでいて、誰でも読むことが出来て、無料で借りて帰ることも出来ます。本棚オーナーになれば《図書係》を出来る権利がついてきます。本棚オーナーに係る《義務》ではなく、やりたい人が出来るように《権利》として図書係を存在させていることが運営に参画してもらおう肝のようです。例えば図書係をしている人にはこんな人たちがいます。子育て世代のお母さんが子どもと一緒に、定年を迎えた男性が新たな日常を模索するために、手作りお菓子を販売してみたいご夫婦だったり、本のある空間が村にあることを大切にしたい地域の女性、ツアーガイドを仕事にする方は訪ねてくる人との出会いを楽しむために…などなど、図書係をする理由は様々です。それぞれが楽しんで活動することが場の運営に繋がる。そんな素敵なくみです。

建築の面では、今に至るまで大きく3回に分けて改修工事をしてきました。①初期の母屋の基礎工事を地元の大工さんに、②その後セルフリノベーションを集う人たちと数年続けてきました。そして昨年、③みんなの図書館を始める際に、朽ちかけた離れの工事を沖本さんにお願ひしました。当時を振り返る沖本さんの文章からは静かな情熱が垣間見られます。



日が暮れると昼間とは違う空間に 写真：山田圭司郎

久住一友（くすみ・かずとも）

木を育て森に生きる（山縣睦子著）で林業を知る。兵庫県立山の学校修了後、養父市森林組合に就職するも2年半で挫折。森林公園や林業会社等を転々とした後に独立（久住林業/2016/明日香村）。

沖本雅章（おきもと・まさあき）

工業高校卒業後に大工見習いを経て、2017年崑三郎（きさぶろう）を設立。木や土といった自然の素材が好きで子供が好きな大工で建築家。

## 生み出さない、編み直す建築 ー土と風と子どもたちの記憶からー

沖本雅章

かつてここにあった建物は、湿度を抱え、光も風も届かず、いつ倒れてもおかしくない姿をしていました。大工としてその建物を倒すことは、まるで命を断つようで恐びなかった。けれど、土を落としながら梁や柱に触れるうちに、その古い家が静かに語りかけてくるのを感じました。長い時間を人とともに過ごしてきた建物には、確かに息づく記憶があるのです。そんな想いから始めたのが、「生み出さない建築」でした。新しいものを作るのではなく、そこにある物や人の力を編み直していく建築。土間には久住林業が管理している山の土を使い、材木はそれぞれが持ち寄った木を活かしました。何かを“生み出す”というより、“編み直す”ことで形が立ち上がったのです。

週末には地域の人たちを呼び、子どもも大人も一緒に土をこね、木を組むワークショップを開きました。泥の匂いと木の香りが混ざり合い、笑い声が風に乗って広がっていく。気づけばそこには、もうひとつの“家族”のようなつながりが生まれていました。僕たちが目指しているのは、そんな心の通うコミュニティ。特に、子どもたちがこの場所を軸に、地域と自然に触れながら育っていけるようにしたいです。

土間は三和土（たたき）仕上げ。吹きぶった雨はそのまま大地に染み込み、裸足で歩けば大地と呼吸を交わすような心地よさがありアーシング効果をもたらす。床下をなくすことで湿気のもも空気溜まりを減らし、木材に風があたり、家全体が深く呼吸するようになりました。もとは二階建ての建物に、中二階を加えました。中央にはシンボルとなる栗の柱。子どもたちが木登りをするように、その柱を回りながら登っていく。階段を上りきった瞬間、ぱっと光景が変わり、目の前に新しい世界がひらける。中二階はスノコ状にして、風や光が抜けていく。その下と上とが、音と空気ですゆるやかにつながるようにしました。二階にたどり着けば、そこは小さな秘密基地。誰にも邪魔されずに心を休められる場所です。

建築を進めながら、ふと子どもの頃を思い描く。木に登り、竹を切って竹馬を作り、水鉄砲で遊んだ日々。そこにあったのは、与えられたものではなく、自分の手で生み出す喜びでした。その記憶が、この建築の原点になっています。

この場所が、子どもたちに新しい遊び場を、大人たちに子供の頃の無邪気な胸の高鳴りを取り戻す場を——そう願いながら、今日も土と木の匂いの中に身を置いています。

## どんな未来にも対応できるように

久住一友

森ラボでは今までに、まちづくりの先進事例や森づくりの話など、地域住民と聞いて語り合う場を開いてきました。また活動は室内にこだわらず、近くの平田の森（私有林）では、森づくりと美術教室を掛け合わせた森ラボbatonを開催したり、地元の子に開放したりもしてきました。様々な取り組みをしてきたのは、かつてスイスのフォレスターが話していたことに影響を受けています。「100年後の予想は出来ても、正解は100年後にならないと分からない。だからどんな未来がやってきても対応できる森（選択肢が複数ある森）を育てるんだ。」これは森づくりに留まらず、建築やまちづくりにも共通する考え方です。

もう1つ大切にしているのは、地域の人（ここでは住民と、仕事や活動で関わっている人、とする）に向けた取り組みであること。それは今も、この先も、この地で多くの人たちが生き、文化を、未来をつくっていく人たちだからです。地域の未来を人任せにするのではなく自分たちで考え行動する。そんな地域になるといいな、森ラボのその先に。



ワークショップで栗の柱を窓から担ぎ込み立ち上げた



地域の左官職人（85歳）に教わりながら竹小舞を補修する



2階へ登る細い梯子を恐る恐る楽しむ 写真：山田圭司郎



平田の森で竹を間引く地域の子どもたち（森ラボbaton）

## 葛城山麓醸造所



S風の森



葛城山麓醸造所（通称：山麓蔵）2024年竣工 撮影 吉村 理

## 里山を100年先につなぐ

株式会社葛城山麓醸造所 所長 中川悠奈

吉村理建築設計事務所 代表 吉村 理

インタビュアー：畿央大学 東実千代

積水ハウス株式会社 佐々木琉偉

10月の爽やかな秋晴れの日、私たちは奈良県御所市にある葛城山麓醸造所へと車を走らせた。登坂の山麓線を進むにつれ、標高が徐々に上がってゆくのわかる。まだ汗ばむ陽気であったが、道路脇のあちこちに咲く彼岸花、周囲にふと視線を向けるとスイスイ飛び回る蜻蛉たち——季節の移ろいを感じる瞬間だ。細い脇道に車を進めながら、清らかな山水の流れる音に、目的地はもうすぐだと確信する。と、その瞬間、棚田の真ん中に建つ醸造所、通称「山麓蔵」が私たちを迎えてくれた。工場と呼ぶには何かが違う、見事なまでに景観に呼応した外観デザインと独特のたたずまいに、一瞬にして心を奪われた。ご挨拶もそこそこに、酒を搾る槽（フネ）を再利用したヒノキの重厚な扉を開いて室内に入った途端、大きな窓ガラス越しに一面に広がる棚田、日の光に輝く豊かに実った稲穂、その先に連なる山の稜線——日本の美しい原風景が目に飛び込んできた。しばし言葉を失った。この素晴らしい景観を、地域の生業を未来につなぐために奮闘する人達にお話を伺った。



山麓蔵の入り口 重厚な扉と杉玉 撮影 佐々木琉偉

## 棚田は存続の危機に

油長酒造は御所まちで1719年に創業し、1998年に12代目山本長兵衛が「風の森」ブランドを立ち上げた。現在は13代目が継承している。「風の森」という名は、棚田が広がり風の吹き抜けるこの地形に由来する。古事記や日本書紀にも記載され、風の神「シナツヒコ」を祀る風の森神社がある土地だ。



棚田の風景 黄金色の稲穂を彼岸花が縁取る 撮影 佐々木琉偉

標高400mに位置するこの地には灌漑用水が届かないため、山から湧き出た山水のみで稲作を行う。しかし、棚田は1枚あたりの面積が小さく、畦は急斜面で機械作業も困難、草刈りや機械の操作は「曲芸」のような危険と負担を伴う。近年では農家の高齢化や生産性の低さから耕作放棄地が増加し、持続可能性に深刻な問題を抱えている。そのような中、地域景観の維持や経済循環に寄与する小規模拠点として計画されたのが、この山麓蔵である。女性二人でもオペレーション可能な小ロット醸造施設として、周辺の棚田から収穫された「秋津穂米」のみを使った特別な日本酒「S風の森（エスカゼのもり）」を醸造・販売している。特筆すべきは、ここが単なる酒造りを目的とせず、地域課題の改善に向けた取り組みの一環として機能する拠点だということだ。そう話してくれたのは、山麓蔵の醸造責任者、中川悠奈氏である。





## 五感を満たすメイドインジャパン「継承と革新」

株式会社One&Presence Holdings 代表取締役  
 株式会社グラッシーズ 代表取締役 芝 幸太郎  
 有限会社椿建築デザイン研究所 代表取締役 椿 邦司  
 インタビュアー：UR都市機構西日本支社 神田 健吾

秋の気配が感じられ始めた10月9日、東京・表参道にある「松葉屋茶寮・方舟GALLERY」を訪れ、代表の芝幸太郎氏、店内の茶室「緑閑庵」を手掛けた建築家・椿邦司氏にお話を伺った。店内は、黒の漆喰壁により静けさと落ち着いた雰囲気と統一されていた。茶の香りが漂うなか、盆栽を目で楽しみ、生きた鈴虫の音色で秋を感じた。「松葉屋茶寮・方舟GALLERY」では、お茶・盆栽・器・菓子など、五感を満たす日本文化を提供しつつ、遮音性が高く、心安らく茶室をサウンドトリートメントによるメディテーションルームとして設え、脳科学との融合も図っている。日本文化発信の最先端で「未来」を伺った。



お月見に合わせて、期間限定のススキが中央に

### 今の時代に生きる形

———「松葉屋茶寮・方舟GALLERY」をどのような思いで経営されていますか。

(芝氏) 私たちは「松葉屋茶寮・方舟GALLERY」で、日本文化の伝統や技術、美意識を現代社会に調和させ、次世代へ継承する活動を行っています。特に高齢化による後継者不足や気候変動で失われつつある日本の技や価値観を、単なる保存ではなく今の時代に生きる形で再生させることを目指しています。お茶、器、工芸品、食などの商品を通じて、生産者や職人の背景やストーリーを伝え、日本文化の本質的な価値を再構築し、新たな市場を創出したいと考えています。また、文化の継承や地域活性化、持続可能な社会づくりに貢献するため、地方の課題を東京で支援し、日本全体や世界と地域をつなぐ役割を果たしていきたいと考えています。

## 日本人のDNA・外国人のための「立礼」

——なぜお茶を選んだのでしょうか。

(芝氏) お茶というのは、一番ごまかしのきかない食材なんです。収穫したものをそのまま煎じて飲むため、味や農薬の有無などがダイレクトに体に影響を与えることから、品質が重要です。コロナ後の世界的な抹茶ブームもあり、日本の茶産業が注目されていますが、生産や加工が追いつかない現状があります。これを一過性の人気にとどまらず、日本の産業を見直し、発展させる必要があると考えています。そのため、作り手や売り手の流通だけでなく、現代社会の生活にお茶をどう取り入れるかを提案することが重要であると考え、最初の商品としてお茶を選びました。



空間を緩やかに仕切る御簾

——茶室「緑閑庵」にはどんな思いが込められていますか。

(芝氏) 設計に入る際、限られた空間でありながら、狭さを感じさせず、心が静まる「特別な場所」にしたいという私の思いを、椿先生に最初にお伝えしました。この空間はなにか特別な施設に限定されるものではなく、日常的な空間にも再現可能な“現代の茶室”としての役割を担っています。椿先生は余白の美や素材の質感を活かし、光、音、香りまで計算した空間を創り上げ、からだ全体でそれを感じるような空間に仕上げてくださいました。実際にお客様の反応として、海外の方からの人気ももちろんありますが、日本の方からも「日本人のDNAが目覚める感覚がある」という感想をいただいております。

(椿氏) この茶室「緑閑庵」は利休の待庵よりも狭い、一畳という非常に限られた空間です。伝統的な茶室の要素がありながらも、遮音性を高めることで独特な空間とすることができました。また、伝統的な茶室のスタイルを受け継ぎつつ、現代社会に溶け込むようアレンジを私なりに加えています。例えば、入口は少し頭をかかめて入るようにして、中は腰掛け待合のような設えにしています。日本の方々だけではなく世界の方々にも文化を伝えるために、畳ではない空間として「立礼」の要素を取り入れています。このような茶室はマンションの一室やオフィスにも設置可能で、心のゆとりやおもてなしの場として活用できるため、現代のライフスタイルに新たな価値を提供する可能性を秘めていると考えています。



「視覚」目を楽しませる盆栽



「聴覚」音でも空間を演出



「嗅覚」部屋の隅々にお茶の香りの仕掛け



「触覚」素材感を生かした設え



「味覚」素材にこだわったお菓子は上階で生産

## 価値あるものを残すために都心で発信を

———東京・表参道の立地をどのように意識していますか。

(芝氏)「骨董通り」という歴史ある街にふさわしい、古き良き日本の情緒を感じられる場所を作りたいと考えました。同時に、現代社会に生きる人々の暮らしや感性に寄り添い、日常の中でふと立ち寄れる空間を目指しています。伝統と現代が自然に交わる空間を作り、日本文化を五感で楽しめる店づくりを進めています。東京では多様な文化が混在しているため日本文化を感じづらいこともありますが、この場所では京都や地方を訪れたような感覚を味わえます。

(椿氏)日本の伝統文化や銘木の価値の理解を広めることは、その「価値あるもの」を残すことに直結します。そのために価値あるものを若い世代に響く形で発信する必要があります。また、壁職人や建具屋、数寄屋大工といった伝統技能のある職人の減少についても同様です。発信力・影響力のある芝社長の活動は、若者に日本の伝統文化が「カッコいい」と感じさせてくれる空間やライフスタイルを提案することで、伝統文化への関心を高めることに大きく貢献できると考えています。

———商業空間と茶室をどのように融合させましたか。

(芝氏)茶道空間の「静けさ」「余白の美」「陰影」を現代の商業空間に融合させることをテーマに椿先生に設計をお願いしました。椿先生には、伝統の形式をそのまま再現するのではなく、光、素材、香り、音など五感を通じて日本らしさを感じられる空間を作っていただいたと感じています。そのおかげで商業施設としての機能性を保ちながら、訪れた人が一息つけるような静寂やゆとりを感じていただけるような空間になりました。

(椿氏)お茶の世界では伝統や作法を守ることが重要ですが、それだけを若い世代や海外の人々に押し付けても理解されにくい現状があります。伝統文化を未来につなぐためには、新しいチャレンジやテイストを加え、商業空間でのマネタイズも含めた多角的な取り組みが必要です。千利休は400年前に茶室に革新を起しましたが、それも400年経てば伝統です。「伝統と革新」を本気で実践し、未来を見据えた取り組みを進めることで、400年後にも日本の伝統が存続する可能性を高めることができると考えています。

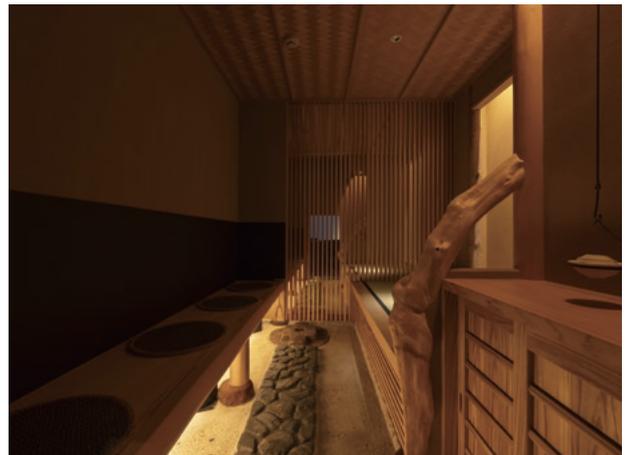
## 健康寿命と最新技術

———茶室をメディテーションルームにする発想にはどんな経緯がありましたか。

(芝氏)私たちが最も大切にしているテーマのひとつが「健康寿命の延伸」です。テスラ取締役であり、スペースXなどの創業メンバーでもあるキンバル・マスクとともに、アメリカで都市型農業の開発に取り組んでいます。光や酸素濃度を制御した輸送用コンテナの中で作物を育てることで、農薬や殺虫剤を使う必要がなく、地域の気象データに基づいて土地特有の香りや歯ごたえを再現できます。さらに、光合成を必要としない暗闇トマトのような新しい栽培技術を開発し、農業が困難な地域や宇宙空間でも生産できる仕組みを構築しました。これらの技術はクラウドで環境データを共有し、世界中で同じ品質の作物を栽培することを可能にしています。気候変動や農業の担い手不足といった課題に対応し、食料安全保障にもつながるプロジェクトです。昨年末には日本法人を設立し、来春には東京にR&D施設が完成する予定です。



「緑閑庵」：入口は低く作られている



「緑閑庵」：中は腰掛け待合のような設え。靴のまま入れる茶室



サウンドトリートメントによるメディテーション（公式HPより）

その仕事を通じて、私は日本各地の農家を訪ね歩きました。そこで見てきたのは、後継者不足や人口減少といった、地域が抱える深刻な社会課題でした。農家だけでなく、その周辺文化を支える職人や生産者たちも同じ悩みを抱えていたのです。このままでは、日本の豊かな文化や技術が失われてしまう——。そうした危機感から、「価値ある日本文化を継承し、未来へと発展させたい」との思いが強まり、松葉屋茶寮・方舟GALLERYを開業することにしました。ここでは、日本文化の美しさを表現し、農家や職人の魅力を発信する場として活動を続けています。また、「食」による健康づくりに加え、心の健康にも着目しています。脳外科医を取締役に迎え、脳をリラックスさせる「YAKUZEN ONGAKU（薬膳音楽）\*」を開発しました。現代人が抱えるストレスや睡眠障害をやわらげ、心身の調和を取り戻す新しいアプローチです。通常、茶室には音楽がありませんが、湯の沸く音や茶筌の音に穏やかな旋律を重ねることで、静けさの中に癒しを生む新しいメディテーション体験\*\*を提案しています。都心にある「緑閑庵」では、この“静けさの中の調和”をテーマに、五感を通じた癒しの空間を提供。リピーターも多く、睡眠改善や時差ボケ調整を目的に訪れる海外の方も増えています。禅の思想や日本的な間の美しさが、今、世界でも高く評価されているのです。私たちは、伝統と革新を結びながら、人々の健康と心の豊かさを育む未来を創る——。その思いを胸に、これからも日本から世界へ、新しい価値を発信していきます。

\* 医師の監修のもと制作された音楽を用いて脳の休息を促進し、自律神経を調整。脳のリラックスやストレス軽減を最大限に促進する。

\*\* 深い内省状態に導かれ、心の平静と集中力が高まり、ストレス解消、睡眠の質改善、新進の健康促進などの効果が期待できる。

## メイドインジャパンをトータルでプロデュース

——最後に、どんな「未来」を創造／想像していますか。

(芝氏)「メイドインジャパン」が大事なキーワードです。「松葉屋茶寮・方舟GALLERY」は、日本の文化や美意識を世界のスタンダードに押し上げることを目指しています。農業を起点に、良質な食材、器、茶、空間設計、季節の体験、作り手のストーリーなど、メイドインジャパンの価値をトータルでプロデュースし、国内外に発信することで新たな価値を創造したいと考えています。この「トータル」っていうのはただの商品だけではなく、季節ならではの体験、空間の設え、ストーリー、作り手さん、産地、学びなどを一体で設計した「世界観」を発信していきたいです。そして、この取り組みを通じて、日本の若者たちが日本文化を背負った仕事に魅力を感じてほしい。我々は、それに対して経済性のあるマーケットを形成する支援を行い、伝統文化を未来へつなぐ役割を果たしたいと思っています。



茶釜がある素敵なテーブル席で取材させていただきました

(椿氏) 芝社長が言われたように「メイドインジャパン」という日の丸を背負って世界に立っていく若者がどんどん増えるというのが大事。楽しいことはエネルギーが自然と出ます。緑閑庵のような、楽しくてパワーが出る仕事こそが大事で、今回、芝社長とこの仕事ができる本当にありがたいと思っています。



芝 幸太郎（しば・こうたろう）

株式会社One&Presence Holdings代表取締役、株式会社グラッシーズ代表取締役、高知県観光特使。高知県生まれ。食・エンターテインメント・環境・文化保全や地域社会への貢献活動を中心に国内外で様々な事業を展開。持続可能な社会の実現にむけ、文化の継承と創出に努めながら、環境に配慮した事業運営を行う。

松葉屋茶寮では「不易流行」を軸に、日本文化の新たな価値創造と、伝統と革新が調和した体験の提供に取り組む。



椿 邦司（つばき・くにじ）

1960年7月4日 千葉県神崎町生まれ  
茶室建築家・茶道家  
高校卒業後ロサンゼルスへ、ロバート・クラウダ・アソシエイツとの出会いで建築の世界へ  
帰国後建築を専門学校で学び直し、フォルマ・デザイン・スタジオを経て、1991年有限会社椿建築デザイン研究所を設立。「バランス」と「心地よさ」をテーマに自然に溶け込む建築空間を造り続けている。

人を想い、場を創る。

**OKAMURA**

## クリエイティブ領域におけるAI設計支援の進化と未来展望

株式会社オカムラ 若尾正仁

私たちが関わるオフィスデザインをはじめ、クリエイティブ領域では慢性的なリソース不足が課題となっています。デザイナーに求められる役割は年々、多様化・高度化しており、それに伴って業務負荷は増え続けています。従来の「表層のデザイン」を担う役割から、課題解決・事業成長・ブランド構築などヘシフトし、より上流工程で戦略的に表現を行う役割へと職能の範囲を広げています。

### 設計領域におけるAIの活用

AI技術の急速な進展により、クリエイティブ分野でも活用が加速度的に進んでいます。

特に画像生成技術の進化は目を見張るものがあります。これまでイメージパースを作成するためには、3Dモデルを配置し、素材やライティングを設定してCGを作成していました。しかし生成AIを活用する場合、ホワイトモデルやスケッチをもとに、デザイナーが思い描く空間をレンダリングレベルで生成することが可能になっています。スケッチやモデリングデータを活用できることで、プロンプトを作成するよりも直感的で、活用のハードルが大きく下がったと感じます。さらに、この技術を応用して画像関連の技術は今後も進化すると考えられます。

また、過去の提案実績からコンセプトやストーリーを生成する取り組みも始まっています。暗黙知であるデザイナーの思考や成果物を、多くの人が活用できる仕組みが整いつつあります。インハウスデザイナーの実績やノウハウを利活用することで、企業全体の競争力を高めることも可能です。

AIに関するサービス全般に言えることですが、特に汎用性の高いAI開発は急速に進んでいます。その一方で、ニッチな機能（特定の市場やシーンをターゲットにしたものや、開発に際して特殊な知見を必要とするもの）の開発は難しく、本格的に活用にはもう少し時間がかかりそうです。

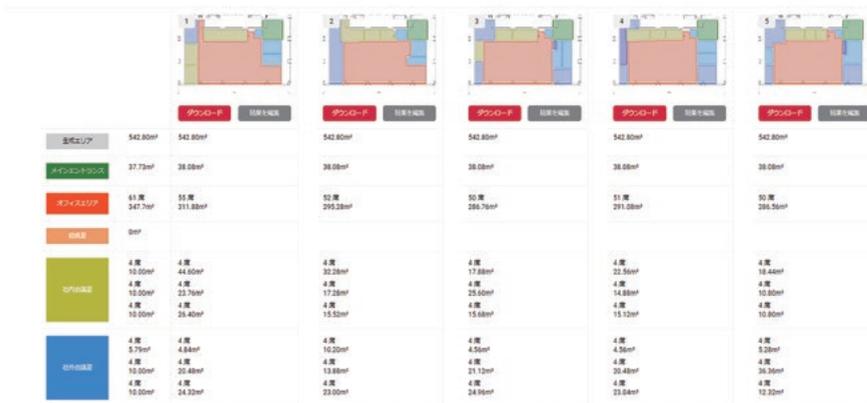
### オフィスのレイアウト自動生成の目的と展望

オカムラが開発した「Work Space Creator」は、オフィスプランのイメージを生成するシステムであり、素早くオフィスプランのイメージを可視化できます。一般的なニーズがある領域とは言えず、非常に限られた領域を対象とした生成AIとなっています。

オフィス構築の初期段階では、設計要件が明確でないことも多くあります。たとえば、入居先として複数のテナントを検討している場合や、社屋を新築するが建築設計がまだ始まっていない場合、オフィス構築そのものの実施を判断している場合など状況は様々です。そのような段階において、イメージの可視化は非常に重要です。イメージを共有することで認識を合わせ、プロジェクト方針や要件決定の議論を加速させることができます。

特に最近のオフィスづくりはプロジェクトチームが推進することが増えており、メンバーがインテリアや建築設計に関する知識を豊富に持っているとは限りません。生成されたレイアウトを起点にメンバーとのコミュニケーションを円滑に進めることができます。AIだからこそ実現できた短時間での可視化と、誰でも使えるUIにより、設計要件の整理・具体化・共有にかかる時間を大幅に短縮できます。

これにより、私たちデザイナーはオフィスのあるべき姿や働き方の検討、空間デザイン業務といった本質的な業務により多くの時間を充てることができ、結果としてお客様に丁寧で価値の高いサービスを提供することが可能となります。



Work Space Creatorの操作画面

## 人間とAIの協働による設計プロセスの再定義

これまでプロジェクト初期段階に、デザイナーが精度の高いスタディを作成し、顧客とのイメージ共有や意思決定に活用してきました。当然、精度の高いものを作成するために多くの工数を割いていました。そのため、提出までの期間が長く、スタディ以上の付加価値という側面では物足りないものでした。

「Work Space Creator」の活用が進むことで、従来はデザイナーにしかできなかった業務の一部が非デザイナーでも実現可能となります。プランニングを検討するための議論の土台となるビジュアルライズは、誰でも素早く行えるようになります。物件初期段階では、スタディの精度よりもビジュアル化のスピードや複数の可能性を検討することが重要です。ビジュアル化された成果物を基にコミュニケーションを取りながら空間構成を検討し、その場で可否の判断を行うことで、議論を迅速かつ深く進めることが可能となります。

デザイナーは、お客様の潜在ニーズを引き出すことや、言語化が難しい内容を整理・言語化し、道筋を立てることが求められます。これらは現時点の技術ではAIによる代替が難しく、まさにクリエイターの本質的な業務領域です。

## AI導入の課題

AIの導入により、デザイナーの業務負荷を軽減できると考えています。AIを活用することで、非デザイナーでもクリエイティブな表現が可能になり、スピード・コミュニケーションの質・提案の質といった全ての面で提供価値を向上させることができます。

一方で、AIだけではデザイナーの良心まで表現することはできません。デザイナーは誰しも設計に際して何かしらの心情や価値観を持っています。設計を行う際の思考プロセスや優先順位は、デザイナーごとに異なります。汎用的なAIでは、そのような特徴を持たせることは難しく、多くのユーザーが使うツールである場合、誰もが妥当だと感じられることが必要であり、偏りは好ましくありません。

現時点ではAI任せにするのではなく、設計者が自身の良心に従い、AIの生成物を活用していくことになるでしょう。

## 今後の展望と課題

確実に言えることは、私たちの業務の中にはAIが得意とする領域が存在し、その部分では今後も急速に活用が進むと予想されます。クリエイティブ領域で活動する私たちは、AIと対峙するのではなく、単に利用するのではなく、AIと人が協力することでしか生み出せない新たな価値を創造することが重要だと考えています。

私たちデザイナーは、デザインすることの意味や価値を明確にし、それを確立していく責任があります。AIを活用しながら、これまでにない新しい領域を切り拓いていくことができれば、非常に意義深いことです。

若尾正仁（わかお・まさひと）

2006年 入社

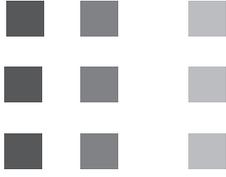
オフィス、金融店舗のスペースデザイナーを経て、デザイナー向けのAI開発に従事

培ってきたデザインのノウハウを、課題解決や新たな価値創造に活用し、より良い未来をデザインしていくことをタスクとしています。

# 「建築と社会」誌

特集一覧 ●2003~2024

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2003 vol.84	● 東畑建築事務所創立70周年	● 九州の地域づくり・まちづくり	● 東海支部会員作品2003 ● 愛知・名古屋二の地の文化・芸術と建築・街づくりを考える	● サスティナビリティ・21世紀に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン	● 建築と五感	● 都市計画法及び建築基準法等の改正	● コンバージョン・インテリアから発信するまちなみ	● 介護と建築・設備	● 建築とノスタルジー~建築の主観的価値について~	● 力と楽しくつき合う方法	● 私の空間作法一会員作品一	● 第50回青年技術者十青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	● 大阪市住宅局	● 都市緑化	● 東海支部会員作品 ● 愛・地球博	● 省リスクな「まち再生」	● リニューアルの技	● 地域住民主体のまちづくりと支援制度	● Product Design+1	● 銭湯~心地よさを求めて~	● 建築家とは何か	● 巨大地震にそなえて	● 私の空間作法一会員作品一	● 第51回青年技術者
2005 vol.86	● 震災から10年	● 「健やか」● 長崎医療センター	● 東海支部会員作品2005 ● 東海における施設づくりへの新たな試み	● 建築の経済化	● 住まい方の変化	● 人工栽培	● 次世代に伝える「木」の建築 ● 「建築と社会」1000号記念	● 改正建築基準法と景観緑三法	● 火災から守る	● 構造の過去から未来へ	● 私の空間作法一会員作品一	● 第52回青年技術者
2006 vol.87	● 都市環境デザインと参加のまちづくり	● 「地方空港の時代」~まちと共存する空港づくり~	● 東海支部会員作品2006 ● 十東海支部特集3部作	● 都市再生の本質~光と影のはざままで~	● 変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	● 身近な省エネルギー~エネルギーをたたく、有効利用する~	● 設計図が伝えるもの	● 建築物の安全・安心	● 第53回青年技術者	● 「セキュリティ」	● もしも...~構造が未来へつなぐ夢~	● 私の空間作法一会員作品一
2007 vol.88	● 光り輝く京都の景観まちづくり	● 学校新時代	● 東海支部会員作品2007 ● 十東海支部特集3部作	● 創立90周年記念一この10年、これからの10年	● あそび考	● こだわりが創る住まいのカタチ	● 住まいの設備と空間の移り変わり	● 建築系雑誌が伝えるもの	● 建築基準法等大改正	● 第54回青年技術者	● ガラスを考える	● 楽しい構造の世界
2008 vol.89	● 私の空間作法一会員作品一	● PFI事業、その後	● 東海支部会員作品2008 ● 十東海支部特集3部作	● まちづくり2011年宣言	● 新ホテル物語	● 設備に役立つ地震対策	● 中国地方を訪ね歩いて見ると ● 小林聖心女子学院	● 建築と景観	● 第55回青年技術者	● 木造住宅を巡って	● 建築においてROBOTが活躍する日は来るのか?	● 自然と戦う構造
2009 vol.90	● 私の空間作法一会員作品一 ● 超電新 中2層新 観音堂の復興	● 水の都にぎわいのある未来に向けて	● 東海-TOKAI オムニバス	● 楽しい福祉	● 体感するインテリア	● 建築空間が求める空気環境(空気質)	● 建築と水	● 実用レベルで展開される施工管理のIT化	● 第56回青年技術者	● 地域の歴史資産を活かしたまちづくり	● 第16回会員作品特集「私の空間作法」	● 構造家日記~頭の中をのぞいてみたら~
2010 vol.91	● 創業110周年記念特集 NIKKEN SEKKEI	● 建築とエコ技術	● 東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	● 食と建築・都市	● ホスピタリティのあるケア空間	● 太陽光発電	● 建築と石	● 再生・受け継ぐ・繋がる	● 第57回青年技術者	● 建築ストック社会の形成への展望	● LED照明の活用・将来を考える~人・地球への思いやり~	● 東京スカイツリー
2011 vol.92	● 100周年 第一種地味アップ再生施設 トラック部時代の挑戦 第1回 会員作品「私の空間作法」	● BIMは設計を変革するか?	● 東海支部復活50周年記念号 東海-TOKAI オムニバス	● まちなかのサードプレイス	● 変遷する“身の置きどころ”	● ECO~建築設備が出来るECO技術~	● 建築と土	● 鉄道駅に注目する	● 第58回青年技術者	● 火災に強い建築を考える	● コンクリートという素材	● 構造教育と社会
2012 vol.93	● 自然災害に立ち向かう力を求めて	● 今、私が思う「和」	● 東海支部特集	● 第18回 会員作品「私の空間作法」	● 中国市場に挑む	● ZEB ネット・ゼロエネルギービルを目標として-低炭素社会の構築に向けて-	● 建築と窓	● 巨大地震に備える	● 第59回青年技術者	● 超高齢社会に求められる住まい	● 歴史的建造物の保存活用	● 身のまわりの世界の「構造」を探る
2013 vol.94	● 東畑建築事務所創立80周年 U-35のましまし ● 成長の時代を考える	● “らしくない”空間 ● 小特集 中之島フェスティバルタワー	● 東海支部特集	● 第19回 会員作品「私の空間作法」	● コミュニティの“かたち”~人と人とのつながりを再考する~	● 無駄から見える節電	● 第60回青年技術者	● グランフロント大阪	● 素材としての建築	● 建築に携わるものに求められること	● 木の街をつくる	● 実験
2014 vol.95	● エリアマネジメントの新展開に向けて	● 融合する空間~新たな試み~	● 東海支部特集 ● 小特集「ABENO REBORN」	● 第20回 会員作品「私の空間作法」	● オフィス設備の変遷とこれから	● オフィスのこれから	● 第61回青年技術者	● 建築と時間	● 省エネ・低炭素のこれまでとこれから	● 大阪・上町台地~あべのルカス 複雑・高度化する建築とその技術について	● てっかいものはすこいぞ	● 安井建築設計事務所 90周年
2015 vol.96	● フォー・オールの時代に向けて	● 場をつくる~プログラムの挑戦~レノベーションのリアル	● 支部復活55周年記念 東海支部特集	● 第21回 会員作品「私の空間作法」	● あかり・文化・創造	● これからの学びのかたち	● 第62回青年技術者	● 建築の価値	● 空き家と向き合う	● 職人がいなくなる!!オリンピックが誘う建設プロセスの変革~	● 形態にあらわれた構造	● 「図面」を変える~BIMの深化が誘う建設プロセスの変革~
2016 vol.97	● 都市の記憶をたどって	● 非日常の棲み処~寝泊まりの進化	● 東海支部特集	● 第22回 会員作品「私の空間作法」	● 人の移動・物の移動・情報の移動	● 第63回青年技術者	● おもてなしと建築	● UR都市機構 西日本支社~暮らし輝く先駆けのまちづくり	● 人口減少社会のまちづくり	● 見えないものを診る~新たな技術による施工管理・検査システムへの展開~	● 構造を支える人と技術のつながり	● ポーダレス~消失する境界と拡張する領域
2017 vol.98	● ニュータウンから学ぶこれからの「計画」	● 第23回 会員作品「私の空間作法」	● 日本の「建築と社会を繋ぐ」プロジェクト100	● 東海支部特集	● 建築設備の伝統と革新	● 第64回青年技術者	● 100年前の建築、100年後の建築~意匠・空間の視点から~	● 観光立国を目指した宿泊施設について	● 100年前の建築、100年後の建築~施工・材料の視点から~	● 社会と繋がるディテール	● 関西で木と生きる	● 時間軸に挑むクリエイター達~時をデザインするということ
2018 vol.99	● 東畑建築事務所創設85周年 ● 温泉と暮らし	● 第24回 会員作品「私の空間作法」	● 東海支部特集	● 働き方と価値: 社会に繋がる多様なワークスタイル	● スポーツイベントを支える設備技術	● 第65回青年技術者	● 第1回片岡安實(日本建築協会論考コンクール)募集テーマ: これからの建築と社会への関係について	● 平成と建築	● 安全安心な木造建築物の利便促進への取り組みと今後の可能性	● 山と建築一そこに山があるから登るのだから!	● 重さと関わる	● こだわりの空間料理人
2019 vol.100	● 共生社会のまちづくり	● 第25回会員作品「私の空間作法」 ● 東海支部創設70周年記念特集「建築と暮らし」~保全・再生・創造~	● 東海支部特集「社会と建築」という流れ	● 建築と社会を繋ぐプロジェクト	● 建設業2.0~価値・意識・生産性~	● 第66回青年技術者	● 第2回 片岡安實(日本建築協会論考コンクール)募集テーマ: 建築をつくるひと~これからの姿を問う	● 建築の仮設性と恒久性	● 「災害。逃げる」	● 新素材の可能性~材料の高機能化とハイテク素材~	● 最先端技術と社会	● オープンマインドな空間
2020 vol.101	● 大阪ベイエリアの再生	● 第26回 会員作品「私の空間作法」	● 東海支部特集	● 建築教育の今	● つなぐ	● 第67回青年技術者	● 第3回 片岡安實(日本建築協会論考コンクール)テーマ: 建築におけるダイバーシティとは	● 消費志向の変化と建築~キを味わう空間としての建築~	● 「都市を鳥瞰する」	● 宇宙と建築	● 構造家日記 2020~構造設計者が今感じていること~	● パーチャルリアリティが創る社会へアバターとの新しい体験の価値を問う
2021 vol.102	● 尽きぬ情熱 佐野正一 生涯100周年記念 ● 社会的危機を越える	● 第27回 会員作品「私の空間作法」	● 東海支部特集	● 「建築と社会」は変わります	● WELL COME	● 第68回青年技術者	● 第4回 片岡安實(日本建築協会論考コンクール)募集テーマ: マルチジェネレーションの新たな意味を問う	● コロナが変える建築と社会	● 地下利用の昔と今と未来~利便性・快適性・安全安心を求めて~	● 木造建築と火災	● 構造学から見る世界	● 建築とインテリアを創る具のプロフェッショナル ものづくりのものがたり
2022 vol.103	● 建築と社会の夢をつなぐ	● 第28回 会員作品「私の空間作法」	● 東海支部特集	● 日本建築協会のこれまで、いま、これから	● 設備の変遷、最先端への道	● 第69回青年技術者	● 第5回 片岡安實(日本建築協会論考コンクール)募集テーマ: 変化がもたらすもの	● 2030年の建築と社会	● 建築とDX	● 海と建築	● 青年技術者×青年技術者	● 建築とインテリアを創るプロフェッショナルの土壌
2023 vol.104	● 万博・温故知新~2025年大阪・関西万博に向けて~	● 第29回 日本建築協会会員作品「私の空間作法」	● 東海支部特集	● 「共創」が導くこれからの社会	● 新しい価値の創造	● 第70回青年技術者	● 片岡安實(日本建築協会論考コンクール)第6回募集テーマ: 「ジェネレーション」が変える建築の未来像	● 共創の場のコーディネート	● 公共まちづくりと共創	● コラボレーションと建築	● 社会と共に創るロングライフ建築	● プロフェッショナル達の共創
2024 vol.105	● 博覧会が変えた社会。2025年万博が変える社会~2025年大阪・関西万博に向けて~	● 第30回 日本建築協会会員作品「私の空間作法」	● 東海支部特集	● 「トランスフォーメーション」の先にある未来	● トランスフォーメーションとWell-being	● 第71回青年技術者	● 片岡安實 第7回 日本建築協会論考コンクール 募集テーマ: Well-being	● ワークプレースのトランスフォーメーション	● まちづくり X ルール	● トランスフォーメーション&ものづくり~人々に幸せを与える~	● 構造技術のトランスフォーメーションと未来への挑戦	● 特別な体験を生み出す至高のプロフェッショナル 場のトランスフォーメーションによる挑戦



# 送風コストゼロでCO<sub>2</sub>を回収 ～パッシブDAC技術の研究開発～

株式会社大気社 並木 洸樹

## ■はじめに

東京都立大学、株式会社大気社、株式会社パンタレイ、長岡技術科学大学、小島プレス工業株式会社、九州大学からなる研究グループが、「ムーンショット型研究開発事業／2050年までに、地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現（目標4）\*」に2024年12月16日付で採択され、パッシブDAC技術の研究開発を開始した。本頁では研究プロジェクトの背景や内容を概説する。

## ■DACの概要

DACとはDirect Air Captureの略で、大気から二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を直接回収することを指す。回収されたCO<sub>2</sub>は地下貯留されたり、工業原料などとして利用されたりする。この際、地下貯留やコンクリートへの固定化などにより大気から永続的に回収CO<sub>2</sub>が隔離される場合、二酸化炭素除去（CDR; Carbon Dioxide Removal）とみなされる。CDRは大気中のCO<sub>2</sub>濃度を低減できる点において従来の排出量削減技術とは一線を画す技術であり、カーボンニュートラル社会の実現やパリ協定の「1.5°C目標」達成に向けて大規模展開が必要不可欠であるとされる。また、回収CO<sub>2</sub>を航空燃料などの原料とした場合でも、元々大気中に存在していたCO<sub>2</sub>を利用するため環境性能が極めて高い。

このように、DACは地球環境再生に向けた切り札とも呼ぶべき重要な技術である。しかしながら、濃度0.04%という希薄なCO<sub>2</sub>を大気から回収しなければならないため、高コスト・高エネルギー消費であることが最大の課題となっている。

## ■パッシブDAC技術の研究開発

現在世界中で開発されている主要なDACシステムのほとんどが、ファンなどの人工風を利用して装置内部に大気を送風している。この動力利用がコスト・エネルギー消費低減の大きなネックになっている。そこでわれわれは、自然風や走行風を利用した送風コストゼロのパッシブDACシステムの開発に取り組んでいる。本研究プロジェクトの社



図1 本プロジェクトの社会実装イメージ

会実装時のイメージを図1に示す。研究開発のテーマとして、「固定型パッシブDACシステム」、「移動型パッシブDACシステム」、「CO<sub>2</sub>脱離回収システム」の三つがある。

「固定型」は自然風活用によるCO<sub>2</sub>捕捉技術、「移動型」は走行風活用による、輸送・移動時におけるCO<sub>2</sub>捕捉技術、「脱離回収」は「固定型」「移動型」で捕捉したCO<sub>2</sub>を高エネルギー効率で回収する技術である。

### ●固定型パッシブDACシステム

全方向集風技術を利用した集風体に自然風が当たることで、装置内部に効果的に大気が引き込まれる。装置内部にはCO<sub>2</sub>と反応する液体吸収剤（イソホロンジアミン）が配置されており、引き込まれた大気と接触させると固体化する。固体化した吸収剤の中にCO<sub>2</sub>が閉じ込められているといったイメージである。この現象を液固相分離現象といい、これによって高速なCO<sub>2</sub>吸収が可能になる。

### ●移動型パッシブDACシステム

本システムは、船や車両の走行風を活用して、送風コストゼロで大気中のCO<sub>2</sub>を捕捉するものである。そのために装置の小型・軽量化を行い、また吸収剤への導風量最適化を両立させる。トラックや船舶などの移動体に装置を据え付けて、内部に取り込んだ走行風からCO<sub>2</sub>を捕捉する。

### ●CO<sub>2</sub>脱離回収システム

「固定型」、「移動型」パッシブDACで捕捉したCO<sub>2</sub>は吸収剤に取り込まれて一体化している。そこからCO<sub>2</sub>を脱離回収するために、マイクロ波による加熱の特性を用いる。CO<sub>2</sub>脱離回収装置は金属でできており、金属はマイクロ波を反射してほとんど加熱されない。よって、吸収剤だけを効率良く加熱することが可能であり、伝熱による従来の加熱方式よりも優れたエネルギー効率を発揮することが期待される。また、CO<sub>2</sub>が脱離した吸収剤は元の液体状態に戻り再利用が可能である。

## ■おわりに

本研究プロジェクトは、送風コストゼロ、液固相分離、マイクロ波加熱といった点で革新性が高く、従来技術と比較して大幅なコスト・エネルギー消費低減の可能性を秘めている。本システムが確立されれば、将来の事業化、ひいては地球環境再生に向けた大きな足掛かりとなる。

\*内閣府が主導し、JSTやNEDOなどの国立研究開発法人が管理・監督する大型研究開発事業。詳細はQRコードを参照のこと。



なみき こうき

株式会社大気社 事業開発本部。非鉄金属メーカーでの技術開発を経て2024年に当社入社、新規事業開発に従事。

# 「ゼノベ」 -既存テナントビルをバリューアップするZEB改修

株式会社日建設計 設計グループディレクター 小谷陽次郎

## ■ 既存ビルの省CO<sub>2</sub>化改修への取り組み

1968年に竣工した、旧日建設計大阪本社ビルの改修プロジェクトである。ZEB化改修によりテナントビルとしての不動産価値を高めることを目指した。環境性能向上と経済性を両立させるこのようなプロジェクトを「ゼノベ」(ゼロエネルギーリノベーション)プロジェクトと名付け、今後広く社会に広めていくことを目指している。

## ■ 単なる機能回復ではないバリューアップと 汎用技術を活用したZEB化

現代のオフィスとして安全・安心に利用できる機能回復のため、内外装の補修や違法性の回復、有害物質の除去に加え、新たに断熱強化や設備機器の高効率化、自然換気可能な窓改修等により、エネルギー消費削減と中で働くワーカーの快適性向上を図った。

既存建物は、道路に面した西面にあえてコアを配置して外部負荷を抑制する設計となっている。約60年前の原設計で既に断熱を考慮した設計に加えて、外壁面や屋根に新たに断熱材を施した。また、高層部窓の断熱性の高いサッシへの全面改修や低層部の木製サッシ新設による二重窓化でより断熱効果を高めた。

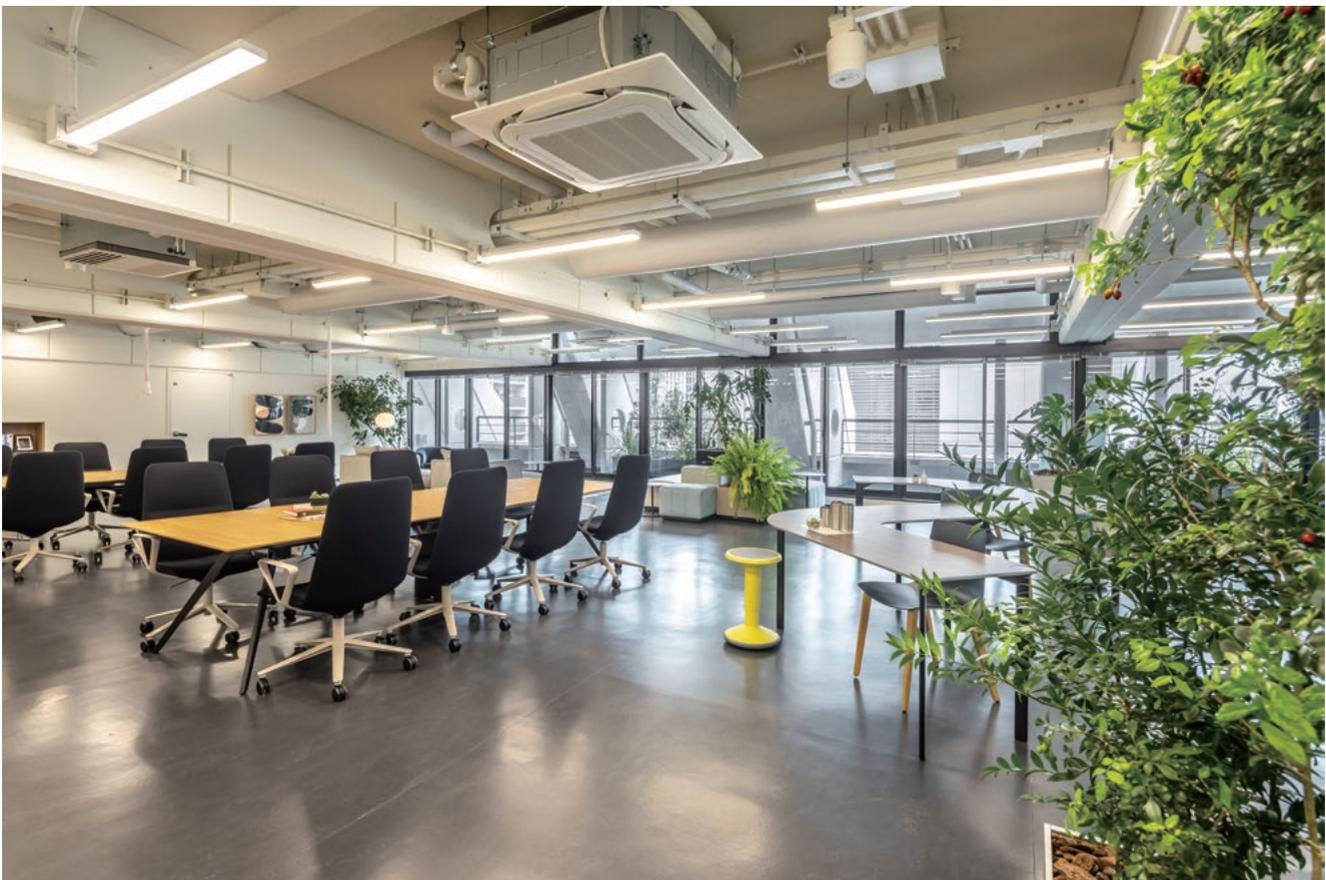
設備機器については平均照度設定や、内部発熱負荷の見直しなど、基準となる設計条件を他事例の使用状況データをもとに最適化するとともに、最新の高効率機器を採用するなどによりエネルギー消費を削減した。

これらの技術は、特段新たに開発した技術や今回のプロジェクトに特化した特殊な技術を使うことなく汎用性の高い手法のみを活用し、費用対効果の高い省エネ手法から優先的に採用することで、コストパフォーマンスの高いZEB Readyの達成が出来た。

## ■ Wellness向上と安全性の確保

各階の窓を開放できるように改修し、気候条件をセンサーで感知してオフィスワーカーに換気を促すランプを窓際に設置した。利用者も省CO<sub>2</sub>削減に取り組むための行動変容を促すデザインである。

高層階の窓際はサッシ位置をセットバックすることで新たにバルコニーを設け、室内への日射を遮るとともに、屋外のリフレッシュスペースとして活用できるようにした。オフィス内部は、天井を撤去し、階高の低い既存の構造で、できるだけ開放感を感じることができる空間とした。トイレには暖かみを感じられる木質系のトイレブースを挿



改修したオフィス 写真：伊藤 彰 [アイフォト]

入ることにより、リフレッシュ空間として甦らせた。

改修特有の取り組みとして既存の日射遮蔽ルーバーや窓ガラスの再利用を行い、リユース・リサイクルと旧本社ビルのレガシー継承にも努めた。

改修工事を行う上で問題となる遵法性に関して、竣工以降手を加えられたことによる違法状態の部分は、今回の改修によりすべて解消した。今回の改修工事は確認申請を必要としない工事のため、既存不適格部分について改修が困難な部分については既存不適格のままとしている。耐震性能上は、耐震診断した結果現行法規で求められる耐震性能を有することが判明したため、旧耐震基準の時期に建てられた建物でありながら耐震改修は行っていない。

## ■ ZEB化と既存建物を使い続けることによる ホールライフカーボンの削減

様々な環境技術の組み合わせを採用することによりエネルギー消費を抑え、建物の運用上排出するCO<sub>2</sub>（オペレーショナルカーボン）は、標準的な同規模オフィスの基準値と比較して約42%となった(BELS\*1基準による試算)。さらに既存建物をそのまま使い続けることで「エンボディドカーボン」\*2を削減し、仮に竣工当時の建物同様に建て替えた場合と比べて約40%「ホールライフカーボン」\*3が削減できた。(50年を評価期間とする。)

12月号の法令コーナー巻末の幹事寄稿については、2023年12月から始まっており、今回で3回目になります。意欲的な法令コーナーの寄稿で、1ページに収まらないといったときの余白を利用させていただいています。今回は、せっかくの機会なので、この法令コーナーがいつから続いているのかを、すこしだけ調べてみました。

日本建築協会ホームページの過去記事検索で、「法令コーナー」を入力すると、1967年10月号が一番古い記事としてヒットしました（当時は法規委員会企画されており、「法規委員会」で検索すると、法令コーナーという表題ではありませんが、法令に関する情報記事は1954年10月号以降でも確認されます。※2025年10月寄稿時現在）。

記事の内容も非常に興味深く、新法令の紹介にとどまらず、建築法規の問題点、疑義・論争などの掲載もあり、協会誌『建築と社会』の資料的価値は高いと改めて感じました。

すべての記事を確認できていないので、いつから始まったかは定かではありませんが、少なくとも、すでに半世紀が経過しており、この記事の企画に、法令分科会委員・オブザーバーの皆様と協力して携わらせていただいていることを光栄に思います。

また、読者から、法令コーナーにおいて取り上げてほしいことがあ

## ■ 「ゼノベ」プロジェクト始動 不動産の環境性能向上と経済性の両立を実現

現在国内のオフィスビルストックのうち、築年数20年以上のものが大都市圏\*4では約70%を占める。一方2030年までに事務所等の業務部門におけるCO<sub>2</sub>削減目標は2013年度比で51%であり、不動産業界におけるネットゼロ達成には、既存オフィスビルの環境性能向上が不可欠となっている。株式会社日建設計、株式会社日本政策投資銀行、DBJアセットマネジメント株式会社は、環境性能と経済性の両立を目指し、「ゼノベ」に取り組み、今回第一号案件として実現した。

「ゼノベ」は、今回の手法のような環境改修の普及と持続可能な再生モデルを提示することで、他の多くのビルへの水平展開を可能にする試みである。本プロジェクトは、2050年のネットゼロ実現に向けた既存ビルの環境性能向上という喫緊の課題に対する重要な一歩となる。

\*1 BELS：Building-Housing Energy-efficiency Labeling System

建築物省エネルギー性能表示制度

\*2 エンボディドカーボン：新築・改修・解体時に発生するCO<sub>2</sub>排出量

\*3 ホールライフカーボン：建物が一生のうちで排出するCO<sub>2</sub>

\*4 東京都区部、名古屋市、大阪市のデータ



こたに・ようじろう

1986年株式会社日建設計入社

現在に至る

れば、ご連絡いただけると幸いです（取り上げることができるかどうかは、内部の調整、執筆者の依頼等の諸事情で、お約束できるものではないこと、ご了承ください）。

会員の皆様は本会ホームページより、協会誌『建築と社会』の過去分は閲覧可能です。

2025年度 法令分科会幹事 河野 学

2025年を終えるにあたり、次に記す法令コーナーご執筆者各位にお礼申し上げます。ありがとうございました。（敬称略にて記載）

神戸市：磨家孝明（1月号）・折原武久（9月号）、国土交通省：政策統括官付地理空間情報課（2月号）・杉野友香（4月号）・杉田雅嗣（11月号）、京都市：中島吾郎（2月号）・井上慎也（6月号）、広島県：危機管理監危機管理課（3月号）、米子市：片山麻由（5月号）、株式会社ユーデーコンサルタンツ：山口信一（7月号）、国立研究開発法人建築研究所：宮内博之（8月号）、株式会社綜企画設計：今川与志雄（9月号）、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社：藤木泰斗／秋元康男（10月号）、株式会社日建設計：小谷陽次郎（12月号）

# Member's Forum

活動報告の頁

## イケフェス大阪2025スペシャルツアー日本建築協会Presents! 「大大阪100年、中之島中央部を歩く」レポート

生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪（OPEN HOUSE OSAKA）2025の連携プログラム「スペシャルツアー日本建築協会Presents! 大大阪100年、中之島中央部を歩く」が2025年10月25日（土）に行われました。このプログラムは協会の情報見学小委員会の委員（中尾勝悦、阪口浩平、中谷真、橋本博行、奥村朋孝）が進行、引率を行い、案内人として、史料研究会の橋寺知子先生、阿部文和先生、玉田浩之先生、案内人サポートとして、安田徹也先生に協力を頂き開催されました。



ツアー参加者を前に挨拶する指田会長（左）

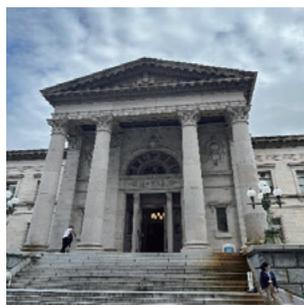
冒頭、ツアーの出発点となった中之島の大阪市中央公会堂前にて、集まった参加者皆様へ指田孝太郎会長から主催団体である日本建築協会の紹介とともに今年のテーマである大大阪と呼ばれた時代の解説を交えた挨拶がありました。その後、3班に分かれ、大阪市中公会堂を皮切りに中之島近辺の新旧の建物を見ながら西へと巡るツアーがスタートしたのですが、どうにもお天気の様子が怪しく…。

最初の中央公会堂や大阪府立中之島図書館、大阪市役所などは何度も訪れている中之島の中心スポットですが、案内人の先生方の解説を聞いたときに知らなかったこと、発見の連続です。

中央公会堂の定礎石の「定礎」を渋沢栄一が揮毫したことを紹介された時には参加者の皆様が驚きの声を上げていました。



大阪市中央公会堂



大阪府立中之島図書館



大阪市庁舎



日本銀行大阪支店と玉田先生

その後、国の重要文化財でもある大江橋を渡り大阪堂島浜タワーの16階展望ロビーへ。淀屋橋交差点の2棟のタワーも加わり、すっかり景観の印象が変わった御堂筋。その御堂筋を難波方面まで一望できるパノラマビューに感嘆の声をあげながら、御堂筋の歴史についての解説に熱心にメモをとる参加者が多く見られました。



大阪堂島浜タワーの16階展望施設「WowUs」

ツアーの後半は、新ダイビルやフェスティバルタワー、ダイビル本館など、大大阪時代の建築やモダニズム建築の名残を感じつつ、すっかり高層ビル群となった中之島の西側を土佐堀川に沿って巡りました。最新の建築技術による建築の中に、過去の姿や記憶を留めようと様々な工夫や挑戦が織り込まれていることに多くの方が興味津々の様子でした。

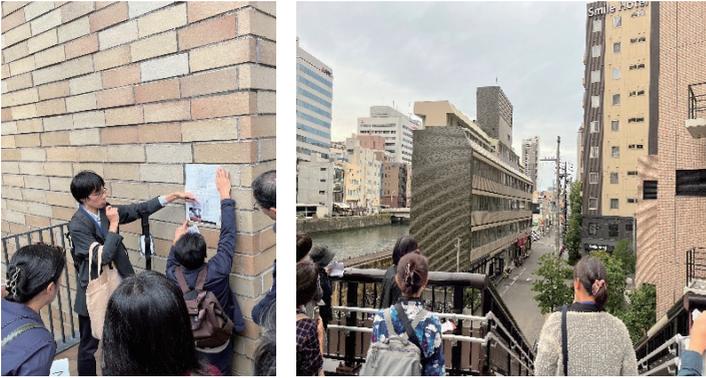


新ダイビル前（村野藤吾の旧ビルに設置されていた羊が今は緑地の中にある。）

ゴール地点は大阪中之島美術館。お天気もつかどうかハラハラでしたが、参加された方、関係者の方、皆さんの日頃の行いが間違いなく良かったのでしょう、無事にツアーを完了することができました。

終了後のアンケートには「知らなかった歴史や背景に触れられて楽しかった」「わかりやすい説明で建築を見る楽しさが分かった」など満足頂けたことが伺えるご意見が多数寄せられていました。

(文責 奥村朋孝)



中之島フェスティバルタワーと阿部先生 (左)  
リバーサイドビルディング (右)

ここ数年は天気に恵まれていたこのツアーですが、今年は前日、いや当日までヤキモキすることになりました。ですが、何とか最後までもちこたえ、参加者の皆様が笑顔で帰っていかれる様子を見ながらホッとしました。いつもながら、先生方の解説を通して新たな発見や驚きを頂くことができ、知っていたつもりの風景の解像度が上がったように思います。参加された方々が熱心にメモを取っている姿が印象的でした。関係者の皆様へ御礼申し上げます。

(奥村朋孝委員長／鴻池組)

毎年恒例の街歩きツアー、今年は中之島界限。実は勤務するオフィスが淀屋橋でして、さらに移転前はダイビル本館に入居しておりましたので、自身が10年ほど過ごしているエリアの歴史を知ることができる機会であり、個人的に非常に楽しい会でした。

参加者の皆さんも非常に熱心で、講師の方の説明に楽しげに耳を傾けていただきました。

去年のなんばまち歩き企画では実現できなかった、「御堂筋を上から一望する」ということを大阪堂島浜タワーで実現できたのは非常に嬉しいことでした。

歴史ある建物が残っていく一方で、新しい建築が次々と生まれて、街並みの楽しみ方もどんどん変わっていく。そんな都市のダイナミックな一面も感じる事ができた会だったと思います。

(中谷真副委員長／大林組)

スペシャルツアーを終え、アンティカ・オステリア・ダル・ボンピエーレで夜食。カウンターの間隣りもガイドブックを横に建築談義。シェフや店長もイケフェスの人の出を分析。年に一度のフェスティバルは、大阪の街に息づいているように感じました。日本建築協会のイケフェス参加は、2018年に設楽前会長が提案し、石田潤一郎先生と佐野吉彦元会長によるリレートーク『大阪ガスピルに託された夢---白亜のビルと近代大阪』に始まり、今年で8回目となりました。大阪の街に託された夢として、イケフェスが末永く根付いていくことを願っています。

(中尾勝悦委員／中尾総合建築設計事務所)



ダイビル本館前と橋寺先生

友人にイケフェスについて話をすると「イケフェス？ なんか聞いたことあるけど・・・よう知らんわ！」たいていこんな返事が返ってくる。イベントの魅力を言葉だけで伝えることは簡単ではない。

イケフェスや日本建築協会主催スペシャルツアーの楽しさを実感してもらうため、来年は友人の好きな焼鳥屋を最終到着地にして、まだ建築や街歩きの魅力に気づいていない彼をイケフェスに誘ってみたいと思っている。

(阪口浩平委員／きんでん)

曇り空の中、参加者が大阪市中央公会堂へ続々と参集され、当ツアーに対する皆様の期待を感じました。ツアーは3班に分かれ、中之島エリアを約2時間かけて回りました。参加者は橋寺先生の話熱心に耳を傾けておられました。私自身も委員として参加させていただく中、新たな発見があり、とても勉強になりました。

橋寺先生、日本建築協会事務局の皆様ありがとうございました。

(橋本博行委員／戸田建設)

## 京都支部：太田病院三河内分院現地調査及びインタビュー記録（2） —沖種郎の足跡と地方集落における文化財のこれから—

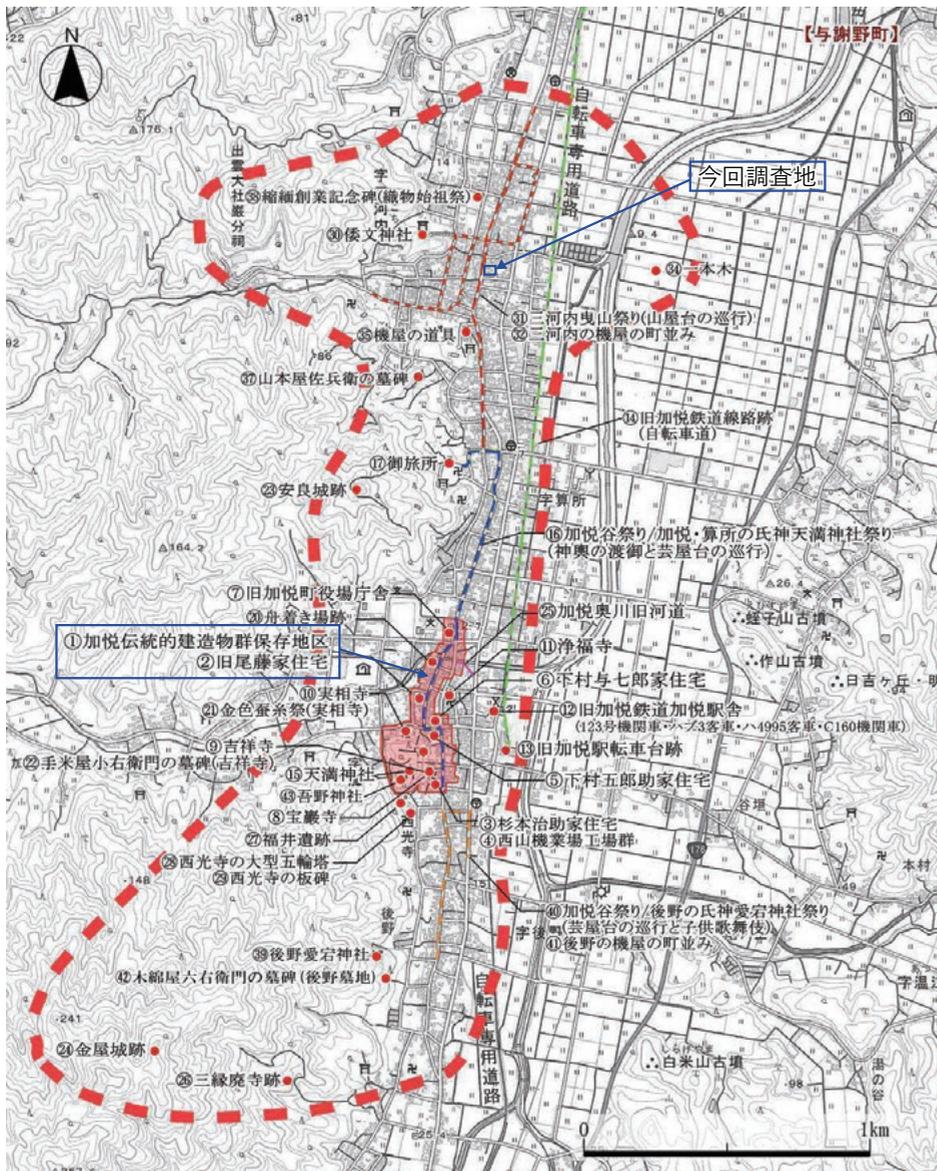
日時：2025年3月29日（土） 14：00～15：00 建物調査 15：00～17：30 インタビュー  
 立会者：太田互氏（沖種郎と従兄弟同士）、太田貴美氏、清原啓護氏（与謝野町教育委員会）  
 日本建築協会京都支部：今村友里子、加藤正浩、津島利章、百合野耕治（記録文責）

今回はインタビュー記録の後半となります。太田病院三河内分院のある地域の文化的背景やその継承についての話しとなります。前回の報告と合わせご一読いただければ幸いです。

### ■Ⅳ 歴史の継承と地方集落に於けるその可能性

今村：与謝野町の教育委員会（太田互氏は与謝野町文化財保護委員会

会長でもある）としては、太田典礼さんを取り巻く歴史っていうのは、どのように把握されているんですか？【図1】



【図1】与謝野町文化財保存活用地域計画 2022年7月P142の図37に加筆

—父典礼は、与謝野町名誉町民に選ばれています。また、妻が町長してたから余計に言いにくかった。それと太田典礼というのは特別な考え方を持った人だから皆に理解してもらうのは非常に難しい。尊厳死協会の理事長をいつまでもしていたとは思ってなかったし、そういうものが広げられたらいいと思っていた。

今村：この建物って、すごくいい場所にあると思います。地域の方が、集まってくるようなコミュニケーションの場所にもできます。

太田貴美：父が活着ている頃はこの家がそうだったですよ。地域の人たちが寄ってきては、酒飲んだりしながら。東京のいまの状況やらを。父さんを信仰してる人たちが大晦日の日にはおにぎり作ったりとか、いろいろとはあった。だけれども監獄まで入れられた人だからなかなかそんなあれはないですね。（特別なことはしたくない）お父さんに、精神的な考え方からは確かに、互には内緒やけどな、と言いながら、ここで聞いたことがものすごく私自身は貴重だった。

今村：太田典礼さんの業績はもう少し時間が経つてくると、歴史的な事実としてしっかりと捉えることができるようになるのではないのでしょうか。

—太田典礼について調べたいとかで、資料等は大学の先生などには、提供します。

百合野：建物を足がかりにしてここの歴史をつないでいくという方法もあるんじゃないでしょうか。

—それにはある程度の財力とか援助がないとできないですね。三井財団とかは、博物館作ったりしている。それだけの財力があります。多くの博物館は今そういう状況です。民間の博物館がいろんなところで、財政難のために合併したり閉鎖したりの状況です。

この野田川の地域でも、私も文化財の審議委員をしているんですが、厳しくなってますね。

“ちりめん街道”でさえ保存が出来ない瀕死の状態になってる建物がいっぱいあるわけです。

この間もちりめん街道の一角で娘さん達が東京で弁護士してられるんだけど、自分とこの実家がその一角にあるもんだから、早く潰してしまいたい。歴史的な価値よりも、財産処分をきちんとして、子孫に負の財産を残しておきたくないような考えかたですね。

### ●宮津太田病院が武田病院に名前を変える経緯

今村：[写真1] 例えば、建物に興味がある方で、買い取って活用したいという方がもしいらっしゃったら。

—もうただで差し上げます。宮津の太田病院もそうです。父ははっきり言って、民間病院の時代は終わったと。これからは本当の意味での福祉とか医療をやっていくのなら公立病院しかできないよって言っていた。お前も早く手放した方がいいんだと言っていた。私はあの病院をどう存続させるのが一番いいかって悩んだんです。あの病院で一番悩んだことは、医師の確保なんです。こんな田舎に何千万金を積んでも来てくれる医師はなかなかないんです。その中で一番京都府の中で医師の供給をうまくやってるのは当時、京都の武田病院だったわけです。

私はたまたま私立病院協会の理事をさせていただいていた。京都府の中で、事務長で理事になれるのはたった3人だったんです。その他は、ドクターばかりだった。たまたま私が理事やってた時に、武田先生が理事長をやっていた。



【写真1】武田病院の外観  
設計：沖種郎（RC4F,増築部分はS5F?）

京都で医学会総会もやられたりして。私もお手伝いに行ってたもんですから。父の名前出して、医師の確保に困ってるんでただで差し上げますからあの病院を存続させてもらえないかということで交渉しました。

ということで、当時、ちょうど介護保険もできて、宮津市の介護保険施設としては、あの病院しかなかったもんですか

ら、そういうことも組み合わせて、武田病院の面倒見るならそうしてほしいんですと。

何もないのならやってみようか、とやっていただいた。私ができる借金の分は、私が返済しますので。先生にはご迷惑かけませんということで、病院は差し上げた。今どうにか継続できるようになった。従業員もそのまま勤務できてるし、患者さんもいくださる。

今村：ちりめん街道は魅力的なので京都市内の方とかでも、古い建物をなんとか残して、リノベーションして活用しようと考えられる方もいるのではないかと思いますけど。

太田貴美：新しい世代になっているから、それを支える人たちがいらっしやらない。今まで、ボランティア的にみんなで支えていこうみたいな活動があったんですけど、やっぱりその中で揉めてやめてしまう。

今村：ちりめん街道を構成する主要な建物群がありますが、それらの一つとしては、考えられていないのですか。

—伝建地区のちりめん街道からは離れている。

近くに後藤家いうのがありまして。これは明治から昭和の建築で丹後では有数の座敷を持っている建築物があるんです。その家を改修して祭り博物館みたいなのにしたらどうかといっても、そこは田舎の祭りにあまり興味がない。

### ●三河内祭のこと

それは三河内祭はこの辺の祭りの中では秀逸です。行列するんですけど、芸屋台というのは昔あったんですけど今はない。

この辺で加悦谷祭っていうのは4月の末日の休日にある。三河内の部落だけは3日間祭りが続かないと成立しないんですよ。宵祭と本祭と最後の打ち上げと。5月3日から4日5日とやるんです。今でも成立してます。

祭りも少しずつ町内で違うんです。最後まとまるけども、それぞれのやり方があって。囃子もちょっとずつ違う。

元は三河内の産生（うぶすな）神社の祭りなんだけど、ここの奥に新興宗教がありまして、その教祖が村の神社の宮司にもなって、自分の新興宗教の祭りみたいに変えてやりだした。

三河内の人達が文化の継承のために絶対そんなことは許さん。太田なら文化として運営してくれると乞われて、15年神社総代したんです。その新興宗教に乗っ取られかけた。あまりにも僕が正論を言うもんだから、最後には結局、新興宗教の教祖さんのほうが一目置きますという態度になって。どうにか、昔の祭りをそのまま継承できるようになっているんです。

祭りの記念館とかはない。今加藤君（教育委員会）もだいぶ興味は持つとるが、お金がないから何もできない。

●郷土資料室について（太田互氏は与謝野町立三河内郷土資料室運営委員でもある）

# Member's Forum

## 活動報告の頁

私は父の時から今まで、消防車庫の2階を郷土資料室にして、維持してるんです。それも私が31か32の時こちらに帰ってきた。その頃、プラスチックの文化が一気にこの辺に浸透した。いろんな生活用具がプラスチックに変わってくる。農機具がプラスチックに変わってくるなどがあった。これは木製の文化が捨てられる。地域の史談会の人たちを集めて、今やったらその木製の桶とかいろんな道具が家に残っている。それを村で使ったものを集めて保存しようやないかという運動を展開して三河内資料室を作りました。

昔の役場の議場にこの辺のショーウィンドウのケースを持ってきて、お金がかからないように陳列してた。妻が町長をやった時に消防車庫の2階を建て替えて使用するようになった。そこに今並べていて。今だったらとってもそれだけ集まらないような大正時代から、昭和20年ぐらいのいろんな木製品の室がある。この町内の小学三年生が年1回ずつ資料館に来ている。

子供たちが見学に来ると今でも千歯稲漕ぎをさせてみたりね。

それから大豆を石臼で引かして、お前これ舐めてみい。どんな味か。これきな粉やって。高下駄はいて走り回ったり。ここの資料室は何を触っても構わへん。実際に体験できるような場所にしようと思いました。

ところが、今は引率する小学校の先生がその農機具とか藁で造ったものとか知らないですよ。先生から教育していく必要を感じます。

昔使ったフゴという、わらで作った入れ物がありまして。おひつを入れとくとご飯が冷めにくく美味しい。今どこの家でも炊飯器から直接ご飯よそぐんですよ。だから御櫃と言うのがわからない。昔は、この辺では夏になると竹で編んだ御櫃を使っていた。

今は藁そのものがなかなか手に入らないんですよ。刈った後、藁もバーと切ってしまう。だから僕は時々秋になったらコンバインが入る前の畑に行き、一年分の資料館で使う藁を自分で刈ってね。この辺の人たちはそういう協力はしてくれる。

節分の時に神社で豆を配るんです。資料館で使うからちょっと豆を余分に買うといってくれ言うて。僕は総代の時はそういうことやってきた。

### ●せめてできることは図面保存か？

百合野：建物に興味があってきたんですけど、まさに奥が深すぎて、どうやってこれを知ってもらおうとか、考えなければいけない。この建物をきっかけに、世間にこういうことがあったということをもっとアピールしたいと思うんです。

—私も町の文化財保護委員をもう40年やってます。委員会ができた時からの一番古い委員なんでそろそろやめんといかんと思ってるんです。一番の問題は、文化庁は簡単にね、保存してお金儲けできないかという。こんな田舎で、そんな簡単にできるもんじゃないですよ。去年の文化財保護委員会の研修会で、文化庁がしっかりしてくれない

と、我々何するのかわからないと、いちゃもんつけといたんですけどね。

彼らは文化財を守ろうと一所懸命やってるけど、お金はない。全国的にも有名になった弥生時代のガラス釧(くしろ)<sup>注</sup>腕輪ですが、それを保存するところが与謝野町には今ないんです。きちんと保存できる施設に委託している。本来なら文化庁が収蔵庫ぐらい建てるのが当たり前なんです。

こんな状態なんでこの建物も図面で保存できるようなところまで持っていけたら上等かなというぐらいの気持ちしか実際ないんです。

町のレベルを見てもちりめん街道でさえ、将来は図面保存しかできない時代になってくるんじゃないかなと思うぐらいです。どこの伝統建築地区見ても、そういう時代ですね。

**加藤：**尾藤家は重要文化財建築になりました。【写真2】

—尾藤君とは友達なんですけど、彼はうまくやって建物だけ町に寄付して。地面は尾藤家のもので、賃借料が入ってくる。ところが、あの尾藤家の建物を維持するためには、人件費も含めてものすごく金がかかるんです。それは今町で問題になっている。文化庁が指定してくれたものぐらいい文化庁が持つといて欲しいのですが。文化庁は指定はするけれど、保存は自分でやるというような態度ですからね。

**今村：**道具のこともそうですけど、使っている世代がいなくなると、形骸化してしまうと思うんです。建物も結局、中に入って感じ取れなくなったら、いくら図面が残っていたとしても、その雰囲気や建っている風景としてはわからなくなる。本当は残した方がいいと強く思うんです。だけど、おっしゃることはよくわかりますし、お話を聞いていると、次の世代の方に負担にならないようになってすぐ思ってもらえるのかなと思います。町のことをいっぱいやられてる中での十分わかっているご判断なので、仕方ないんだろうなと思うんです。

沖種郎さんの前の万博で作ったマッシュバルーンという建物があるんですけど、パリのポンピドーセンターに図面が寄贈されたんです。



【写真2】尾藤家の外観 重要文化財

それはパリのポンピドーセンターの方が、戦後の空気膜構造の面白い建物で、全然知られてないけど、沖種郎さんって方がいらっしやるってなった。その図面がないかとパリのポンピドーセンターが目をつけて、展覧会の図録にもその写真が載っている。

この太田病院三河内分院の建物も知られてないけど、無くなったと知ったら、惜しむ方が出てくるんじゃないかと思うんです。

——伝統建築地区はその範囲でしかできないし。ここの場合やるとすれば単独でのクラウドファンディングしかできない。

皆さんのお考えとか、研究に役立つことがあれば、いくらでも場所や時間は提供させていただき、お話もさせていただきたいと思います。が、これを永久保存してくれと言われても、今の時代ではできない。息子や孫に負の遺産を残したくない。

この辺のお墓でさえ負の遺産になってるわけです。墓地組合の維持さえもできなくなっている。我々ここに住んでる者は、毎年2回、墓地の山道の補修に行ったりしながら労働奉仕やってるんですけど、それさえ年齢が高くなってくるとできなくなってくる。ましてや墓地組合の毎年の2000円の会費を、もう勘弁してくれという人もでてくる。都会行った人はもう見向きもしない。この辺の地方文化がだんだん消えていく、というのが現状です。

宮津市庁舎をどうされるのか気になる。資料室みたいにして保存だけできるようにするとかいう話だが、一応壊さないとは思う。ミップル（宮津市浜町の商業施設 阪急宮津ビルの通称）に移る事はいいことだと思う。与謝野町もそういうことができればいいなと思う。

医師会館ももうすぐ壊すんじゃないですか。准看護婦学校があったりしたんです。【写真3】



【写真3】与謝医師会館の外観 設計沖種郎（木造2階）

今村：使われていますが、確かに使いづらくはなってきたるんですね。あちらよりもこちらの方が外観のインパクトがあるかなと思います。ここ単体で考えるよりは宮津に今残っている大きいものと一体として、広域的に考えたらどうでしょうか。

百合野：こちらの建物（太田病院三河内分院）を見たいという方はいらっしやいますか。

——皆さんと同じような考え方で、時々見せてくれ。面白い建物です

ね。前から興味があったというような方がいらっしやる。

ただ、雨漏りしているんでどうにかしなくてはと、息子とは言うてゐるんですが、壊すにもお金いるし4、5百万かかるんです。直してという気はないんです。

今村：私は沖種郎さんについての論文を書くときにどういう観点だったら面白いのかなと考えていて、太田典礼さんとの関係を重ね合わせて、このあたりの残っている建物が、ここは親戚の方でとか。そういう関係も含めて言えたら、面白いんじゃないかなと。

——物語性が出てくると思います。あるファンの人が太田典礼さんの話を朝ドラにしましょう、て言っていました。

私の妻は町長してて、“お母さん町長”という本を出している。町議して20年ほどで京都府の町村の中では初めて議長となったことがある人なんです。20年でもうやめようと思ったら、今度町長になれていう。野田川町の町長三期やりまして。

そのとき丹後大合併を京都府が言いました。今の京丹後市が宮津市と一緒にするのはいやだと六町で自分たちだけで独立した。その後、残された宮津市と与謝野町と加悦町と伊根町と岩滝町が協議して、伊根町は独立していく。あと四町は名前まで決めかけていた。町民の意見聞いたら宮津市とはいやだということになった。

宮津市やっぱり城下町で士族ですよ、後の三町は町民でしょ。そういう意識がありますね。

百合野：お聞きしたい話がまだありますが、この辺で本日は終わりといたします。長時間ありがとうございました。

## ■エピローグ

宮津市庁舎を手掛かりに沖種郎の建築を追っていて、この建物（太田病院三河内分院）に出会い、幸いにも太田互氏のご好意により調査・インタビューをする機会を得ることができた。

この丹後地域での沖の精神形成の過程や、伯父太田典礼の影響の大きさが経済的な面、精神的な面、社会的な面とともに浮彫りになってきた。

太田互氏にこの建物についての見解を直接伺うことはできなかったが、御夫妻のこの地に建物と共に生きる様が建物のオーラとして我々に語り掛けてきているかのようであった。

また、地方集落での文化財、生活習慣、無形文化の継承の大変さを、それを担って実践してきたご本人に聞くことができた。文化財継承の現時点での諸問題をあぶりだす思わぬ世界が開けてきた時間となった。今後沖種郎の係わったこの建築を見つめ続けることで、歴史継承の可能性の萌芽でも見つけられないかと思っている。

注)：【ガラス釧（くしろ）】与謝野町の弥生時代の古墳「大風呂南墳墓群」で1998年の発掘調査で墳墓の中から見つかった瑠璃色ガラスの腕輪。外形10センチ。重要文化財。現在は与謝野町立古墳公園のはにわ資料館にレプリカが展示されている。

個人会員の皆さまへ

# ご応募お待ちしております。招待券プレゼント！

応募フォームは協会ホームページの会員専用ページ内にあります。

応募期限は毎月20日、厳正に抽選して当選者を決定します。(初回申込者を優先いたします。)

## ① 特別展 小磯良平展 2組 | ——幻の名作《日本髪 of 娘》

韓国国立中央博物館から、90年ぶりに日本へ



小磯良平《日本髪 of 娘》1935年 韓国国立中央博物館蔵

本展は、韓国国立中央博物館の協力により、小磯良平の戦前の代表作のひとつ《日本髪 of 娘》が90年ぶりに日本で公開される貴重な機会である。本展では、この不朽の名作とあわせて、小磯記念美術館が所蔵する小磯作品を中心に紹介することで、小磯良平がたゆまず追い求めた日本人の油彩画の精髓を展覧する。

モダンなデザインの訪問着をまとい、日本髪 of 髪 (かつら) をつけた礼装の神戸の令嬢を描いた《日本髪 of 娘》。当時32歳であった小磯は、大阪の百貨店・高島屋が開催した着物の展示会「百選会」を訪れ、この着物と出会い、高価をいとわず自身で購入して制作にのぞんだ。一時期消息が判然とせず、幻の作品と考えられていた《日本髪 of 娘》を心ゆくまで鑑賞していただきたい。

期 間 2026年1月10日(土)～3月22日(日)  
10:00～17:00 ※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、1/13(火)、2/24(火)  
※1/12(月・祝)、2/23(月・祝)は開館

観 覧 料 一般1,200円、大学生600円  
\*高校生以下無料(証明書の提示が必要)  
\*神戸市在住の65歳以上の方600円(同上)  
\*障がい者手帳など提示の方無料

会 場 神戸市立小磯記念美術館  
神戸市東灘区向洋町中5-7

TEL.078-857-5880



#小磯良平#李王家美術館#韓国国立中央博物館#和装婦人像

## ② 拡大するシュルレアリスム 視覚芸術から 2組 | 広告、ファッション、インテリアへ

日常を変える、世界を変える。



ルネ・マグリット《レディ・メイドの花束》  
1957年 大阪中之島美術館

シュルレアリスムとは表現の様式をいうものではなく、「高次のリアリティと、夢の全能性」への信頼に基づいた、あらゆる創造行為をさすものであろう。

シュルレアリスムの発生から約100年を経た今、本展は日本国内に所蔵されている多様なジャンルの優品を一堂に会し、シュルレアリスムの本質に迫る。

本展のみどころ

- 1 芸術界にとどまらないシュルレアリスム！
- 2 シュルレアリスムの名品が大集結！
- 3 ファッションとシュルレアリスム エルザ・スカパレリ

期 間 12月13日(土)～2026年3月8日(日)  
前期 12/13(土)～1/25(日) 後期 1/27(火)～3/8(日)  
10:00～17:00 ※入場は開場の30分前まで

休 館 日 月曜日、12/30(火)～1/1(木・祝)、  
1/13(火)、2/24(火)  
※1/12(月・祝)、2/23(月・祝)は開館

観 覧 料 一般1,800円、高大生1,500円、小中生500円  
\*障がい者手帳(身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳)などをお持ちの方(介護者1名を含む)は当日料金の半額(要証明)  
\*一般以外の料金で使用する方は、証明できるものの提示が必要

会 場 大阪中之島美術館 4階展示室

大阪府大阪市北区中之島4-3-1  
TEL.06-4301-7285  
(大阪市総合コールセンター)



#シュルレアリスム#アンドレ・ブルトン#ルネ・マグリット

会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課  
(soumu@aaj.or.jp) までお問合せください。  
招待券は当協会より郵送でお届けいたします。  
当選発表は招待券の発送をもってかえさせていただきます。

information

③ | ゴッホ展  
5組 | 家族が見つない画家の夢

ファン・ゴッホ家のコレクションに焦点を当てた日本初の展覧会



フィンセント・ファン・ゴッホ《画家としての自画像》  
1887年12月-1888年2月ファン・ゴッホ美術館、  
アムステルダム (フィンセント・ファン・ゴッホ財団)  
Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

アムステルダムのファン・ゴッホ美術館には、画家フィンセント・ファン・ゴッホの約200点の油彩画や500点にのぼる素描をはじめ、手紙や関連作品、浮世絵版画などが所蔵されている。そのほとんどは1973年の開館時に、フィンセント・ファン・ゴッホ財団が永久貸与したものである。

本展では、ファン・ゴッホ美術館の作品を中心に、ファン・ゴッホの作品30点以上に加え、日本初公開となるファン・ゴッホの手紙4通なども展示し、家族が守り受け継いできたコレクションを紹介する。

期 間 2026年1月3日(土)～3月23日(月)  
10:00～18:00 金曜日は20:00まで  
※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 第1・第3月曜日

観 覧 料 一般2,000円、高校・大学生1,300円  
\*中学生以下無料  
\*身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳(愛護手帳)、特定医療費受給者証(指定難病)のいずれか所持の方、通常料金の半額  
\*付き添いの方は、各種手帳(「第1種」もしくは「1級」)または特定医療費受給者証(指定難病)を所持の場合、1名まで通常料金の半額  
\*学生・生徒は学生証(生徒手帳)提示が必要。

会 場 愛知県美術館  
名古屋市東区東桜1-13-2  
愛知芸術文化センター10F  
TEL.050-5541-8600 (ハローダイヤル)



#フィンセント・ファン・ゴッホ#ゴッホ

④ | CREVIA マチュピチュ展  
5組 |

謎の天空都市、六本木の天空に舞い降りる。



本展は、2021年のアメリカ・ボカトン美術館を皮切りに、世界各地で開催され、高い評価を得ている。ペルー政府公認の本展は、アジアでは初開催となる。日本初上陸となる本展では、ペルーの首都・リマにあり、世界的にも有名な考古学博物館「ラルコ博物館」より貸与された、貴重な文化財約130点を展示する。

王族の墓から出土した黄金の装飾品や神殿儀式で用いられた祭具などは、初めてペルー国外に貸し出される展示品である。日本で初公開の貴重な資料を通じて、古代アンデス文明の叡智や芸術を間近に体感できる。

また、世界遺産マチュピチュを独自の技術で再現した没入型空間や、アンデス神話の英雄「アイ・アパエック」の冒険を軸に展開される壮大な物語とともに、来場者がかつてない知的冒険へといざなう。



「カニの姿をしたアイ・アパエック」紀元後100-800年  
ラルコ博物館所蔵 ©MUSEO LARCO LIMA-PERU

期 間 2026年3月1日(日)まで 期間中無休  
10:00～19:00 ※金・土・祝前日は20:00まで  
※年末年始の2025/12/29(月)～2026/1/4(日)は  
10:00～19:00  
※入館は閉館の60分前まで

観 覧 料 一般2,800円、中高生1,900円、小学生1,300円  
\*未就学児無料  
\*障がい者手帳をお持ちの方とその付き添いの方  
1名までは入場券相当料金が半額

会 場 森アートセンターギャラリー  
東京都港区六本木6-10-1  
六本木ヒルズ森タワー52F  
https://machupicchuneon.jp/



#マチュピチュ#アイ・アパエック#インカ帝国#アンデス文明

## 常任理事会

## 第5回常任理事会

10月22日(水) 17:30~19:45

協会会議室&amp;WEB

出席者 指田会長ほか10名

- 議事 (1) 上期事業執行状況(案)について  
 (2) 役付役員等の選任について  
 (3) 「建築と社会賞」について  
 (4) 「建築と社会を考える」について  
 (5) 「会員の集いIN東京」の実施について  
 (6) 協会誌特集年間テーマについて  
 (7) 「建築と社会」誌掲載記事の著作権について  
 (8) 大阪都市景観建築賞 幹事の交代について

## 編集企画委員会

## 第7回編集企画委員会

10月10日(水) 18:00~19:35

WEB

出席者 三宗委員長ほか8名

- 議事 (1) 11月号 構造分科会・状況報告  
 (2) 12月号 空間デザイン分科会・状況報告  
 (3) 1月号 計画分科会・状況報告  
 (4) 2月号 ひと・まち・建築小委員会・状況報告  
 (5) 次年度年間テーマ投票、その他

## 第6回構造分科会

10月3日(金) 18:00~19:00

WEB

出席者 正野幹事ほか6名

- 議事 (1) 「構造の頁」について  
 (2) 11月号特集について  
 (3) 2026年度年間テーマ案について  
 (4) その他

## 第6回環境分科会

10月8日(水) 18:00~18:40

WEB

出席者 橋本幹事ほか8名

- 議事 (1) 「設備の頁」の企画  
 (2) 10月号万博コラム報告  
 (3) 2026年度年間テーマ案について  
 (4) その他

## 第7回施工材料分科会

10月16日(木) 16:00~17:00

協会会議室&amp;WEB

出席者 門野幹事ほか8名

- 議事 (1) 編集企画委員会の報告  
 (2) 2025年10月号特集ふりかえり  
 (3) 次期幹事選について  
 (4) 4月号担当ページについて  
 (5) 編集企画委員会出席について  
 (6) その他

## 第7回法令分科会

10月8日(水) 16:00~16:50

協会会議室&amp;WEB

出席者 河野幹事ほか6名

- 議事 (1) 2026年特集テーマ(第2回検討)  
 (2) 法令コーナー  
 (3) 情報交換

## 第7回ひと・まち・建築小委員会

10月23日(木) 19:00~19:30

## 協会会議室&amp;WEB

出席者 澤田小委員長ほか5名

- 議事 (1) 作品の選定  
 (2) 作品の掲載状況、予定  
 (3) gallery掲載報告、予定  
 (4) その他

## 事業委員会

## 7回CCCフォーラム

10月20日(月) 19:00~21:10

WEB

出席者 本田事業委員長、本田(隆)小委員長ほか5名

- 議事 (1) 若手技術者フォーラム(万博関連企画)の開催報告及び振り返り  
 (2) CCCフォーラム ログデザイン検討  
 (3) 青年技術者交流会について  
 (4) その他

## 出版委員会

## 第6回出版委員会

10月28日(火) 17:00~18:25

協会会議室&amp;WEB

出席者 中尾委員長ほか7名

- 議事 (1) 既刊書籍経過報告  
 (2) 制作進行中の書籍  
 (3) 出版に関する座談会について  
 (4) 11月の会議日程と会場について  
 (5) その他

## 教育委員会

## 工高生教育小委員会

## 第71回工高生デザインコンクール予備審査

協会会議室

10月8日(水) 18:00~19:30

出席者 谷口小委員長ほか4名

- 議事 (1) 作品の予備審査  
 (2) 役割の確認

## 未来創生プロジェクト

## 第6回建築次世代委員会

10月24日(金) 18:30~19:30

協会会議室&amp;WEB

出席者 中村未来創生委員長ほか7名

- 議事 (1) リアル見学会 募集内容確認  
 (2) 人に焦点を置くインタビューイベントの検討  
 (3) その他

## 第7回2040委員会

10月23日(木) 19:30~21:00

協会会議室&amp;WEB

出席者 吉田リーダーほか6名

- 議事 (1) 活動報告の掲載について  
 (2) 今後の活動について  
 (3) その他

## 第6回U-35委員会

10月29日(水) 19:30~22:00

協会会議室&amp;WEB

出席者 大屋リーダーほか12名

- 議事 (1) 新メンバー紹介  
 (2) 今後の活動について  
 (3) その他

## 審査会

## 第71回工高生デザインコンクール審査会(工高生教育小委員会)

10月18日(土) 13:30~17:10

OMMビル2F 204・205号室

出席者(委員会) 橋寺教育委員長、谷口委員長ほか4名

出席者(審査員) 岸下真理審査委員長ほか9名

- 議事 (1) 第71回工高生デザインコンクール審査会  
 (2) 講評、表彰式の日程確認、役割分担について  
 (3) その他

## 見学会

## 学生のための現場見学会(建築次世代委員会)

株式会社村田製作所守山イノベーションセンターPJ見学会

10月28日(火) 15:00~17:00

講師 株式会社竹中工務店

作業所長 遠藤智昭氏、井本真人氏

参加者 12名

出席者(協会) 中村未来創生委員長ほか3名

## 連携事業

## 生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2025ツアー下見

10月11日(土) 13:30~16:00

出席者 橋寺知子(関西大学准教授)、

玉田浩之(滋賀県立大学准教授)、

奥村情報見学小委員会委員長ほか3名

## 生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2025 連携事業

## スペシャルツアー日本建築協会Presents! 大大阪100年、中之島中央部を歩く

10月25日(土) 13:30~15:30

大阪市中央公会堂をはじめとする歴史建築群、周辺オフィスビルや銀行、そして新たな文化の拠点である大阪中之島美術館まで

参加者 33名

案内人 橋寺知子(関西大学准教授)、

阿部文和(大阪歴史博物館学芸員)、

玉田浩之(滋賀県立大学准教授)

出席者(協会) 指田会長、

奥村情報見学小委員長ほか4名

## 第44回大阪都市景観建築賞

## 第二次審査会(現地審査)

10月20日(月) 9:30~17:30

## 最終審査

10月20日(月) 17:30~19:30

大阪府建築士会会議室

審査委員 橋寺委員ほか7名

出席者 井上副会長ほか14名

- 議事 (1) 事務局からの挨拶  
 (2) 入選作品の選出  
 (3) 審査講評について  
 (4) 審査体制について  
 (5) 今後のスケジュールについて  
 (6) 閉会挨拶

編集企画委員会 (2025年10月現在)

副会長(編集担当) (環境分科会)  
川合 智明 大橋 巧  
理事(編集担当) 北野 勝也  
木場 将雄 齋藤 悠輔  
佐藤 榮一 生野 大輔  
中尾 勝悦 寺井 千佳  
中原 岳夫 仲村 憲一  
西 博康 △橋本 直樹  
橋寺 知子 梶井 貴廣  
松島 茂樹 松本 健  
◎三宗 知之 持留 崇志  
吉村 英祐 (施工材料分科会)  
副委員長 今井 信之  
桑原 悠樹 上原 秀介  
古谷 隆祥 △門野 陽  
編集委員 河合 智寛  
■特集小委員会 能瀬 直樹  
(計画分科会) 藤丸 啓一  
△飯田 匡 南野 貴洋  
田中 直人 森田 健  
松田奈緒子 吉田 正友  
山崎 晋一 (法令分科会)  
吉村 英祐 奥山 陽二  
(建築デザイン分科会) 日下部美嘉  
桑原 悠樹 △河野 学  
小林 敬政 時見 正人  
小林 啓明 吉田 悠起  
篠木 大輔 ■ひとまち建築委員会  
杉江 順哉 浅田 翔大  
田中 和八 伊藤 翔  
田中 裕大 上田 寛彬  
樋口 展寛 太田 栄治  
平岡 翔太 加嶋 章博  
△松本 和也 片岡 政規  
米山 剛史 貴志 泰正  
(空間デザイン分科会) 佐伯 先史  
東 実千代 ▲澤田 純一  
今井 充彦 鞆野 淳司  
河西 孝平 豊田 充広  
神田 健吾 西田 佳代  
△黒柳 亮 平野 尉仁  
佐々木琉偉 増田 敬彦  
清水 香澄 山本 和宏  
宗田 菜々  
(構造分科会) (順不同)  
古島 正博  
榊原 啓太 ◎委員長  
△正野 和司 ▲小委員会委員長  
瀧野 敦夫 △幹事・小委員会  
多田 全希 副委員長  
萩原 学  
水島 靖典  
藪田 智裕  
山下 真輝  
山本 佳明  
吉村 純哉

地球環境を守り、100年建築に貢献する

**NACL** のアルミ表面処理

株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail:sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階  
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632  
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7  
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

お客様の抱える問題やニーズに  
より速やかに、より丁寧に対応するために

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号  
TEL.06-6976-8761/FAX.06-6976-8765  
東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階  
TEL.03-3526-5580/FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

印刷 2025年11月25日  
発行 2025年12月1日  
発行人 一般社団法人日本建築協会  
大阪市中央区大手前1-7-31  
電話 06-6946-6981  
印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所  
定価 1390円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

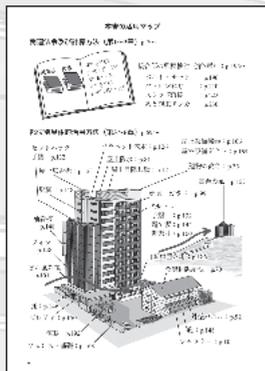
# イラストと計算例でわかる 外装材の耐風設計・施工



日本建築協会 企画  
西博康 著

A5判・256頁・本体 2700円+税

あなたは何もチェックせずに  
「OK」の2文字だけを探していませんか？



屋根・外壁・笠木・手摺・  
屋上目隠し壁・外構設置物…など、  
多発する台風による飛散被害。  
風圧力の設定からビスの使い方まで、  
お客様を被害者・加害者にしないための  
知識を実務者視点でやさしく解説。

設計者  
施工者  
外装業者  
必携

学芸出版社

〒600-8216  
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811  
Fax 075-343-0810

http://www.gakugei-pub.jp/  
E-mail info@gakugei-pub.jp

現場写真 でわかる

# 木造住宅工事 の納まり

春山浩司 著 / 玉水新吾 監修 / 日本建築協会 企画  
A5判・256頁・本体 2800円+税



基礎



屋根・樋



FRP防水



電気設備



木工



外壁



内装・左官仕上



給排水設備

職人の技量がバラバラで、  
チェックの仕方がわからない…

設計と施工の  
連絡不足で  
無理な現場納めが  
横行している…

顧客満足につながるノウハウを  
現場写真 + 図面 + ポイント整理 で  
ギュッと1冊にまとめました。



そんな  
施工管理者必携!

学芸出版社

〒600-8216  
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入

Tel 075-343-0811  
Fax 075-343-0810

http://www.gakugei-pub.jp/  
E-mail info@gakugei-pub.jp